第29回　特別研究会

「内面世界と自己意識」

梶　田　叡　一

１９９３年　３月１７日　　南山短期大学にて

■ 特別研究会

「内面世界と自己意識」

梶　田　叡　一（かじた・えいいち）

1941　松江市に生まれる
　　米子で小・中・高校を卒業
1964　京都大学文学部哲学科心理学専攻卒業
　　国立教育研究所、日本女子大学を経て
現在　大阪大学人間科学部教授・文学博士
専攻　心理学、教育研究
著書　『自己意識の心理学』（東京大学出版会）
　　『内面性の心理学』（大日本図書）
　　『生き方の心理学』（有斐閣）など多数

伊藤：人間関係研究センターの第２９回特別研究会を始めたいと思います。今日は大阪大学の梶田叡一先生に来て頂きました。

梶田：私はなかなか本題に入りにくい人間なもんですから、自己紹介をしながら話を進めたいと思います。

１．私のバックグラウンドにあるもの

(1)カトリックと道元・親鸞

私は幼児洗礼のカトリックなんです。どうしてだか祖母が明治時代に洗礼を受けて、そのあと一族がみんなそうなったのです。先ほど南山教会に行ってきたんですけれども、今から３０年ほど前、名古屋でカトリック学生連盟の大会があった時に来たことがあります。その次の年でしょうか、京都の聖母学院で私が準備委員長になりまして大会をやったこともあります。ただそのころからかなり長い間、１０年間くらい私は教会に行きませんでした。それからまた思うところがあって復帰しまして、現在に至っているわけです。ただし、多くの日本のカトリックの方とはちょっと違って、私はカトリックの旧教の方なんです。ラテン語のミサやベネディクションが懐かしい方です。社会的活動を中心に考えるのは宗教でない、カトリックは極めてラジカルな精神的なものであるべきだ、という風に思っております。ラジカルというのは急進的という意味ではなく、本質的という意味においてです。

私の人間についての感覚や思想はカトリックの中で養われた、ということに後になって気がつきました。今でもイグナチオ・ロヨラの『霊操』だとか、あるいは『キリストに倣いて』とか、ああいうのを私は非常に好きで読むわけですけれども、小さいときに出会いを作っていただいているわけです。カトリックには修養書と呼ばれる本があるのですが、これはきわめてヨーロッパ的な精

神修養の伝統を持っております。それは古代また、ギリシャにさかのぼる自分自身との対話の仕方・付き合いの仕方の訓練を含んでいます。これは、私の学んだ非常に重要な大事なことだと、今になって思います。

しかし、私の人間についてのものの考え方の大本は、学生時代に出会った道元であったり、特に最近では親鸞にあります。同じ宗教という言葉を使っても、キリスト教でいう宗教と仏教でいう宗教とは、両方がほとんど重なるところがないくらい違うということを感じております。ですから私は、道元や親鸞を学びながら、カトリックであるということとはなんの矛盾もないという風に思っております。私のものの考え方の土台を培ってくれたのは、カトリックを土台としながら道元や親鸞に大きく触発されるという、広い意味での宗教的バックグラウンドだと思っております。

(2)自己意識の心理学

もう一つ、私は高校くらいから心理学をやろうと思っておりまして、それで京都大学の文学部の心理学に入ったんですけれども、そして心理学をやったおかげで今私の考えていることが形を整えつつあるわけですが、しかし私の学生時代にやった心理学というのは、結局、反面教師としての心理学だったわけです。

京都大学の文学部の哲学科心理学講座というのは当時は園原太郎という教授と、あと二人の助教授の方がおられました。園原太郎先生は発達心理学をやっておられたのですが、体が弱くて年に何回かしか出てこられない。したがって多くの学生が結局二人の助教授についたんですが、一人は鼠で学習実験、もう一人は暗室で知覚の実験をやるんです。私が高校の頃から考えていた心理学とは全然違うわけです。何が悲しくて鼠なのか、何が悲しくて暗室の中で「見えたか・見えないか」なんてやらないといけないのか、ということです。行動主義がまだ支配していた時代、１９６０年代の前半でしたから。そういうことで私は学部の時も大学院の時も心理学については独学をいたしました。

私はいくつかの論文を『心理学研究』とか『ジャパニーズ・サイコロジカル・リサーチ』に出しましたけれども、一度も先生にも先輩にも見てもらったことがありません。勝手に出しました。今は「勝手に出すものではない。ちゃんと指導教官に目を通してもらいなさい」と言ってますが、私はやってません。ドクター論文もそうです。私はマスターだけ出て国立教育研究所というところに行きました。そして、そこでドクター論文を、これも勝手に、書いたわけです。

国立教育研究所には１１年間おりました。その時にもう一度勉強しなおしまして、心理学にも非常に広い世界があるということが段々わかってきたわけです。その当時は、私だけが唯一の２０代の所員でしたから、１００人くらい所員の方おられましたけれども、あらゆる仕事がふりかかってくるわけです。金の計算から、書類作りから、とにかくうるさいものです。で、勤めが終わって

夜帰って子供二人をあやしながら、当時はマイコンも何にもない時代です、因子分析にしても軸を回転するのにグラフにプロットして定規を当てて、この辺に軸を通したら面白そうだとやって、後はその角度を計ってソロバンで計算ですよ。そのころやっとカシオの大きな電卓ができた頃ですから。

私が国立教育研究所に就職して3、4年したら京都大学の文学部は占拠されたんです。学生たちが2年くらい占拠していたわけです。それで見に行った時にばったり園原教授に会いまして、その当時いくつかもう心理学研究に論文を出してましたんで、「おまえまとめるんだったら学位論文持ってきていいよ」といわれました。そこでドクター論文を我流で書いて持って行ったんです。

振り返ってみますと、私は我流でやってきて良かった、心理学ということにこだわってきて良かった、と思います。というのは、心理学ということでも世界中ではいろんな動きがあるわけです。例えば当時の60年台、ご承知の通り行動主義批判も始まっておりますし、G．W．オルポートとかマズローだとか出てるし、臨床心理にもいろんな動きがあったわけです。ところが、狭い昔風の心理学研究室にはそういう情報が入って来にくい。私は若干勉強したつもりです。大学院の時に、仲間と一緒に『サイコロジー―ア・スタディー・オブ・サイエンス』という全7巻のものを読みました。この中には例えばカール・ロジャースの自伝なども入ってますし、もちろんサルやネズミの話も入ってます。そういう一方、私は非常に早めに一人で東京に行きまして、そこで東大系のいろんな方々とお付き合いしたのも、大きな勉強になりました。私がつきあった人が良かったのかもしれませんけれど、私の周りにいた人はみんな情報が広かったように思います。

そういうことで少しずつ自分のやっていることに自信を持って、セルフ・コンセプトで行こうということで現在までやってきたわけです。私がセルフ・コンセプトについての最初の論文を書いたのはマスター一年の時です。当時九州大学の教育学部から出ていた「教育社会心理学研究」という雑誌に出したのが最初です。それから後ずっとセルフに関する研究をしてきたわけです。これが二つ目に申しておかなければいけない私のバックグラウンドです。

(3)ブルーム理論を土台とした教育研究

もう一つ、私の教育研究というバックグラウンドについてお話ししておかねばなりません。私は国立教育研究所で6年間ほど子供の発達の国際比較のプロジェクトに参加していました。とっても面白かったんですよ。例えば私は知能検査について非常に批判をしているわけですけれども、実は当時の研究の結果に基づいているわけです。例えば国際比較で使うレイブン・マトリックステストという知能検査があるんですけれども、それをやってみると、日本の子だけ飛び抜けて良いのです。アメリカとかドイツとかイギリスの共同研究者たちは日本だけずるやったんじゃないかと言うんですが、どうやりなおしてみても本

当に飛び抜けて良い。ご承知かと思いますけれども、レイブン・マトリックステストというのは、たとえばマトリックスの中に一つ空白部分があって「ここに何が入るか？」というわけです。縦横で考えれば何が入るかすぐに分かるわけです。こういう言葉を使わないテスト、文化が違っても言葉が違っても比較できるテストというのが一時期流行ったんです。今でもこれを使うことがありますが、これなんかやったら日本の子はものすごく高いです。ヨーロッパ系の人たちとは比べ物にならない。カンファレンスで、これはなぜだろうかという話をしたことがありますが、多分日本人は漢字を使っているからパターン認識に優れているのだろうということになりました。まだ仮説的な説明にすぎませんが。

いい勉強をさせて頂いたんですが、それが丁度３０の時に一段落したんです。ところが丁度そのころ大学紛争がたけなわで、大学とか短大とかに出ることが難しい。どうしようかと思っていたら当時の所長平塚益規先生が、私がいた部門は第３研究部という心理屋ばかりがいた部門なんですけれども、おまえせっかく教育研究所というところにきてるんだから、教育のこともちょっと勉強してみてはどうかということを言って下さいました。そういうことで、１９７１年の８月に６週間スウェーデンであったベンジャミン・ブルーム主催の国際セミナーに行ったんです。

これはユネスコとＯＥＣＤがお金を出しまして３５カ国から参加者がきまして、３０人前後のセミナーが６つ設けられるというので、日本からは４人が参加したんです。アメリカとかドイツとかいわゆる先進諸国からも人がきてましたけれども、主として発展途上国の教育科学の指導者を養成するというので、ファカルティの方も１０カ国くらいからきていたんです。ベンジャミン・ブルームが一番中心だったわけですけれども、ハビガーストという発達課題で有名な社会学者とか、あるいはデューイと組んで評価という概念を初めて作ったタイラー、スウェーデンのフセンとかインドのダーベとか、偉い人が数多くきていたんです。そこで初めて私は教育の勉強をして、それから２０年間いろいろな形で教育とかかわって勉強をしてきました。これが第３の柱でしょうね。

そこで学んだのは、例えば「形成的評価（フォーマティブ・エヴァリュエーション）」という考え方、つまり、一人一人の実態を機会に応じて捉えながら、その時その時の打つ手を考えなければいけないという発想です。これはセラピーでもそうかもしれませんけれども、いろいろと関わりを持っていくと関わりの方に一生懸命になってしまう。そうすると、自分がやっていることが全部良く見えるようになるのです。だからどこかで本当に自分が関わってやってることが相手にどういう変容をもたらしているかということを見て取って、それを自分の側にもフィードバックし、相手にもフィードバックしてやっていかなければ、結局独善の雪だるまになってしまいます。フォーマティブ・エヴァリエーションというのは基本的にはそういう考え方なんです。

例えば小学校で、「みんなわかった？」とかわいい先生がおっしゃると子供たち４０人みんな「わかった」と言うんです。「面白かった？」というとみんな「面白かった」と言うんです。これで安心していたら教師失格ということになります。２／３くらいは、みんなにつられてとか、その場の雰囲気とか、先生への義理とか、そんなので「わかった」とか「面白かった」とか言っているんです。一人ひとりの顔の後ろ側にどういう形で「わかった」という事実が成立しているかということにこだわらなければ、これは独善の上塗りみたいなものになってしまいます。

さらに言えば一人一人を伸ばしていこうとするなら、一生懸命に関わっているだけでは駄目であって、この子にどうなってほしいかという願い（これをオブジェクティブズ《目標》という言葉で言いますけれども）のイメージをおおまかでいいから作っておかないと、その時に自分が没頭してやった、面白かった、充実感があったというだけで終わってしまいます。学校に教育委員会の指導主事が授業を見にきまして「今日はとってもいい授業だった。子供たちの目がきらきらしてた。先生も子供も本当に生き生きとしていた。」なんて言います。きらきらしてたって、生き生きしてたって、わかってないときは何もわかっていないんです。つまり、きらきらとか生き生きということを越えて、ここでの体験が積み重なっていったら子供が前と違うどういうものの感じ方をするようになるだろうか、ものの考え方をするようになるだろうか、前と違うどんなこだわりを持って自分なりにその解決を追求していくようになるだろうかという事を考えていかねばならない。つまり育ちについてのイメージを持っているのが専門家というもので、それがない人は、ただ一生懸命やってましたというだけになるわけです。日本は一生懸命の文化ですから、不祥事が起こったときに管理職が言い訳するのに一番いい方法は、「本人は本当に一生懸命やってたんです」という言い方です。これを聞くと、みんな「ふーん」と納得して言って帰るんです。一生懸命であろうと何であろうと悪いことは悪いんですけれどもね。結局は自分なりの願いのイメージを作っていくことがやれてないということです。

むづかしい話ですけれど、見える学力だけだったら育ちのイメージも作りやすいんです。けれども、どういう風に関心が深まっていったらいいか、どういう風に物の感じ方が変わっていったらいいか、どういう風に内側から促すものが出てくればいいか、なんていう見えにくい育ちの部分については大ざっぱなイメージしか作れません。しかしこうした内面の育ちについてのイメージを作る、そして外側に現れた兆しから内面の変容・育ちを見てとる、こういうことをやっていかなければどうにもならない。これも私はブルーム理論に触発されて考えるようになったことですね。

こういうことで、もう２０年前になりますけれども、目からうろこが落ちたような感じがしました。私はそれまで心理学しかやってなくて、自分で心理学

研究者だというアイデンティティを持ちながら人間研究をやってきたわけです。けれども教育というのは相手に関わっていって、相手を変容させることです。変容させるには、どう変容させたらいいかというイメージが必要だし、どういうことで変容してきたのかという見極めとか、相手の変容を見て取る手段が必要です。そして関わりの中で、願いと見極めとをつなぐ道すじの中で、こうあってほしいなというイメージと今はこうだなというイメージとをつなぐ軸の中で、こういう風に援助し、刺激し、支え、助言をすると言うことを考えなくてはならない。そういう援助の手だてを自分の側にレパートリーとして持っていて、そしてこの子の今の状態に合わせて、そのレパートリーから一つずつ選んで手だてをこうじていったら相手がどうなるだろうかという関わりのダイナミックスの中で人間を見ていかなければいけない、ということを学ばせて頂いたと思います。

2.「顔の後ろの世界」にこだわる

そういうことで、私の物の考え方には、いま言った3つのバックグラウンドがあるのです。つまり、私はこの三つのバックグラウンドから人間というものを考えてきた気がするのです。

そういうわけで、いま日本の学問のカテゴリーで言うと本当に私は何をやっているのか判らない。大阪大学人間科学部に２４講座があるんです。講座制ですから、教授１、助教授１、助手はいたりいなかったり。私の所は一番大きな講座で教授一人、助教授一人、助手二人、ティーチングアシスタント一人、セクレタリー一人。だから私は威張れるわけです（笑)。それが教育心理学という講座です。ときどき専門は何ですか？と聞かれることがありますが、たしかに私はいま形の上では教育心理学講座をお預かりしている。これは私はミスキャストだと申し上げているんだけれども、まあしょうがない。私は心理学を中心とした人間学と教育研究とをやって行きたい。ですから教育心理学なんてそんなちっぽけなカテゴリーには入らない。いろんな事に関心があります。

そういう事でやってきたわけですけれども、三つの大きなバックグラウンドを土台に自分なりに人間の問題を考えてきて、それで一番私が大事だと思っていることは何かといいますと、人間を理解するには一人一人の「顔の後ろの世界」を問題にしなければいけないということです。これは私のいわば基本テーゼです。「顔の後ろの世界」にこだわるということはどういう事かと言いますと、顔の表はお互い世間で暮らしてますからどんな風にも作ることが出来ます。仮面と素顔と言ってもいいし、役割理論を持ち出してもいいのですけれど、顔の表側、つまり発言をどうするか、顔の表情をどうするか、姿勢をどうするかとか、それはどうにでも作れます。しかし私たちが本当にその人を理解したいとか、ましてや関わりを持ってその人を変えていきたい、変えていきたいとい

うのはおこがましいですが、この人に変わって欲しいなと思いながら関わりを持つ、そういう時には何が問題かというと、表面じゃない。どういう顔をするようになるか、どういう事が口に出せるようになるか、どういう事を姿形で出せるか、じゃないのです。顔の後ろ側で何をどう感じるようになるか、自ずからものをどう考えていくようになるか、どういう事にはっと目を引かれて、どういう事には関心がないのか、何にピンと来て何にピンとこないのかといったことです。あるいは、自分でどういう風になったら「うんなるほどな」と納得できるのか、危急存亡の時には何を自分の本音として突っ走って行けるのか、これがやっぱり人間を理解するときの一番の土台になるんじゃないかと思うのです。

これは宗教にも言えることだと思っています。去年のちょうど今ごろ、大阪キリスト教短期大学の卒業礼拝で講演をさせられました。私はカトリックですけれどもいいですかと言ったんですが、いいというので聖書の話をしました。「偽善とは何か」という題で話したのです。チャプレンが「これは私達にとって一番痛い話ですね」とおっしゃってました。何を話したかというと、「顔の後ろの世界」についてどういう風にキリストは言っていたかということについてです。例えばパリサイ人や律法学者が「私はちゃんとユダヤの律法を守っています、貧しい人にはちゃんと施しをしています、十分の一の税金も納めています、断食も守っています」といった事を言うわけです。そうしたらキリストは、そういう事であなたを善人だと認めるわけにはいかないと言うわけです。ダメだと言うわけです。施しも結構、しかし右の手がやったことを左の手にも知らせてはいけない。自分の頭の上で鈴を鳴らして「施しをしてますよ」というのは本当の施しにならないというわけです。あるいは断食をしてもいいけれども、やるんだったら顔に油塗ってテカテカさせて、私は暖衣飽食ですよという顔をしてやれと言うのです。キリストの教えというのはラジカルなんですよ。恐いんですよ。そんじょそこらのクリスチャンが薄めて薄めて、表面だけ虫も殺さないような顔をして、見かけだけ善人みたいな顔していますけれども、そんな薄っぺらな教えじゃない。世の中と真っ向対決しないといけない話です。聖書を読めば読むほど恐い話です。私はクリスチャンだと自己宣言しているわけですけれども、クリスチャンである間は、そういう怖い教えの後をオロオロついていかないといけないわけです。だからいつも恐いなあと思います。お師匠さんは強すぎる。ま、そういう話をしました。

世の中ですから顔の表側でどう世間とつき合うかというのは大事なことです。だから「シーザーのものはシーザーへ」と言うわけです。だけど「神のものは神へ」なんです。内面にその人独自の世界がどういう形で成立しているのか。その人独自の世界はどういう形で深まっているのか。これは宗教の一番の問題でしょう。お釈迦さんが悟ったときに、もうこれで死のうと思った、もう内面で全てが解決したから。これが宗教の極地ですよ。しかしそこで思いとどまる

んですね。自分の悟りの世界を少しでも他の人に分け与えないといけないのではないか。あるいは禅宗でいくと、みんなにわからせようとは思わないけれど、一個半個の打出でいい、一人でも半分でもいいから、自分の得たこの深い世界を伝えたいというわけです。そういうものをぎりぎりと究極の所まで追い求めたのが宗教の世界ですけれども、しかしそれを心理学とか教育研究に置き直してみたとしても、基本はやっぱり「顔の後ろの世界」です。その人固有の世界がどういう形で成立しているかということを洞察することが人間研究であり、そういう固有の世界をどう育てていくか、どう深めていくか、ということを考えて援助の手を差しのべていくのが教育ということであると、私はそう考えています。

3．実感・納得・本音の世界

そこで出て来るのが「実感・納得・本音」というキーワードです。「顔の後ろの世界」を大事にしたいと考えるわけだけれども、表側に出て来ているものと違うものがあるとすればいったいそれは何だろうか。いわゆる素顔といってもいいかもしれない。あるいは心とその表れと言ってもいいかもしれない。その人なりに「うーんこれがこうだな」と何をどう感じているか、何をどう理解しているか、自分なりにどう納得しているか、あるいは何が本音なのかということです。顔の後ろ側ということでこだわらなければいけないのは、この意味での「実感・納得・本音」です。これは実は、人間を変えていこう、あるいは人間が変わっていこう、という視点を、顔の後ろにこだわるというところに入れていった時に問題となるのです。人間が根本的に変容していくというダイナミックな動きの中で、顔の後ろ側にこだわっていったときに、「実感・納得・本音」という着眼点がは出てくるのです。

じゃあ「実感・納得・本音」ということに着目した場合、まず考えなければいけないのは何なのか。それは、それぞれの人が本当に実感の世界というものをちゃんと持っているのか、納得の世界があるのか、本音の世界が出来ているのかということです。現代はフロムが言う「市場的な構え」の社会です。リースマンに言わせれば「他人志向の社会」です。人々が否応なく手を組んで、顔を合わせて、同じ情報を共有してしか生きていけない、こういう大衆社会になってきますと、正しさとか美しさとか大事さといったものの妥当性、価値にかかわるものの妥当性の根拠はどこにあるかというと、それはみんながそれを承認するかどうかにかかってきます。みんなが拍手してくれればいいことなんです。みんながけなせば悪いことなんです。だから金丸さんは今は悪い人なんです。私は昨日大阪で学校の先生たちに、金丸さんにもいいところがあるという話しをしました。今の政治腐敗に対する人々の怒りをそらすには誰かをいけにえにしないといけないわけです。それにはあの人は格好の人なんです。叩けばいく

らでもぼろがでますから。ただし、すぐ言ったんですけれども、こういう風に言うだけで多分非国民に見えるだろうと。今みんながこぞって叩いている人に同情的なことを言うだけで非国民になるだろうと申し上げました。今そういう時代なんです。日本だとＮＨＫのニュース解説と朝日の社説でだいたい価値が決ってくるようなもんです。つまらんことで大騒ぎして、と思ったりすることもあるんですけれどもね。しかし大衆社会状況の中では、私みたいに異を立てるということ自体がそれだけで異端でしょうね。

やっぱりみんなが手を叩く方に行かないといけないのです。みんなが眉をひそめることはやっぱりみんなと同じように眉をひそめないといけないのです。最近はそのお先棒を担ぐ事に一生懸命という人がいまして、みんなが手をちょっと叩き始めたらそれっというんで手を叩いて回る人がおります。だいたい大学の先生とか文化人というのが多いんですけれどもね。これはインテリの軽兆浮薄さです。インテリと言ったって本当に知的な人は非常に少ないですから。

こういう社会だからこそ一人一人の中に実感の世界をどうやって形成するか、納得の世界をどう形成するのか、本音の世界をどういう風に形成するのか、ということが大きな課題になるのです。逆に言うと、私たちはお互いに、いつの間にか自分の実感の世界が希薄になっているんじゃないか、納得の世界が希薄になっているんじゃないか、本音の世界が希薄になってしまっているんじゃないかということを、いつもチェックし合って自省自戒しないといけない時代じゃないかと思うわけです。

豚も手を叩いてやれば木に登るという話があります。豚は普通は木に登らないわけですが、囃してやればどんなみっともないことでもやってしまうという意味です。だけれど私たち自身はどうなのだろうか、ということです。本当に自分の足で、自分の責任で、一歩一歩着実に生きていこうと思ったら、判らないことは判らないと言わないといけない。自分にピンとこないことはピンとこないと言わなければいけない。どんなに拍手がおこっても自分に向かないと思ったら木に登ったらいけないのです。逆に拍手が全然起こってこなくても、みんなが眉ひそめて見ていても、やらなければいけないと思ったら木に登らないといけないのです。これが「実感・納得・本音」の世界を大事にするということです。まず最初に、自分の中に本当にそういう世界ができているのだろうか、と考えてみる必要があるでしょう。そして、自分が関わりを持った相手にそういう世界が本当に育っているのだろうかを考えてみなくてはならないでしょう。教育などを通じて本当に相手が伸びていって欲しいと願うならば、「実感・納得・本音」の世界を自分の中に作らなくてはいけないという自覚を持たせなければいけないと思います。

こうした着眼は、実は日本人の中に昔からあったんです。例えば長州の吉田松蔭は２７才で刑死するわけですけれども、その時の辞世の歌として残されているのにこういうのがあります。「かくすればかくなるものと知りながら、や

むにやまれぬ大和魂」。こんなアホなことをすりゃこういうふうになるのは百も承知、しかしやむにやまれぬ大和魂なんです。私の内面からうながすものがあってやったんだ、いいじゃないか、という感じですよね。これはさっぱりしています。頭の先っちょで、こっちの方が得ですよ、こっちにいったらうまいことがありますよ、というのとは一味違うでしょう。今の時代は逆です。「やむにやまれぬ大和魂」じゃなくて、「どっちが得かよく考えてみよう」という世界です。「あっちの水は甘いよ」と言われたらちょろちょろと行ってしまう世界です。

吉田松蔭は逆なんです。こうやって若死にしなければいけないことは判っている、だけれどもやむにやまれぬ大和魂なんです。これはやはり人間の弱さということを見据えながら、しかもなおかつその弱い人間がどういう風に自分をまっとうして生きていくかという問題意識が、少なくとも近世において日本人に非常に強くあったということの一つの証拠だと思います。江戸時代の始めでいえば山本常朝という人の言説を集めた『葉隠』という本が出ています。この中で有名なのは「武士道とは死ぬことと見つけたり」という言葉ですけれども、あれは別に「死ね死ね」と言っているわけじゃないのです。二つの道があって、生きる道と死ぬ道と両方あったら、迷わずに死ぬ道の方に行けというわけです。これはどういう事かというと、私たちは頭の先っちょでいろいろと計算してこっちの方が得になるんじゃないか、こうやったらうまくいくんじゃないかと考えてやりすぎると、結局は自分を活かし切れないことになる。損をする方向へ、ともかく損をすると判っていてもやっぱり自分がやらなければいけないと思った方向へ進んで行かないとけない。頭の中ですぐに損得勘定をしてしまうという生き方をしていては結局はどうにもならなくなる。これを山本常朝は言っているんです。

これをもっと分かりやすい例で山本常朝は、「恋で一番美しい恋は忍ぶ恋である」と言っています。ぜひ学生諸君に教えてあげて下さい。二十歳前後というのは恋に憧れているときです。そういう風に生物的プログラムができているんだから恋したい時はすればいい。恋というのは、その恋する相手と一緒にいられたら一番いいと思ったりするんでしょうけど、実はそうならないでもいいじゃないかと思い切ったところに、本当に恋というものを美しいものに昇華していく道があるのかもしれません。自分も生きる、相手も生きるということがあるのかもしれません。自分の感情が満足しさえすればいいというんだったら、動物と同じです。うちの犬も毎朝散歩させてますけれども、今さかりがきましてね、あれと同じです。人間として美しいのは、やっぱり忍ぶ恋でしょうね。

だんだん私たちは市場的な構えあるいは他人志向という中で、拍手が来る方、得になる方に動かされてしまっています。頭の中の考え方も、言うことも、自分の「実感・納得・本音」の世界と無縁なものになってしまっています。少なくともそういう傾きがある、弱さがある、ということをまず考えなければいけ

ないのではないかと思うのです。

「実感・納得・本音」ということで次に考えなければいけないのは、自分自身の「実感・納得・本音」の世界を掘り下げていかねばならないということです。そのためには、ささやかでいいから自分にピンとくるもの、自分が魅かれてしょうがないもの、それを見つけて大事にすることではないかと思います。例えば小さな子供が、ボタンのかけらとか小さな石ころとかを小さな箱にいれて大事にしてたりすることがあります。ところがそれをお母さんとか先生が見て、「そんな汚いもの捨ててしまいなさい」と言ったりします。「こんな物ボタンのかけらじゃないの。もしボタンが欲しければきれいなのがいっぱいあるからそれあげます」とか「なにこんな小石。その辺のありふれた石英じゃないの」ということになります。これでもし子供がそれを捨ててしまったら終わりだと思います。世間相場でものを見てしまうことを学習していくことになります。人には判らなくたって私にピンとくるものを大事にしていく、という習慣がなくなってしまいます。これは大人になってからでもそうです。

私も散歩の時にいろんな物を拾います。特に寒い朝に散歩に行きますと、近くの児童公園なんか、土の上に小石がきらきらしていたりします。寒いから石英とか長石とかがきらきらするんです。私はつい拾って持って帰ります。ほとんどが玄関の横に置いてあります。家の中に持って入ると叱られるもんですから。ただしあんまりきれいなものは持って入ってワイングラスの中に入れてながめています。しかし家に来たお客さんはこれを見て「なんだまあ本当にありふれた石英長石の類」と言うんです。しかし私にとってはきれいなんです。ワイングラスにいれたやつに水でもいれたらもっときれいです。しかし誰一人としてきれいだと思わなくてもいいんです、私がきれいだと思えば。基本はですよ。私はある瞬間にこれをものすごくきれいだと思った、そういう瞬間があるから、そのためにも私はこれをとっておきたい、そう思うものがあるんです。他の人にどう思われたってです。今見るとなんでもないということはあるかもしれません。そういう物を大事にしていけるかどうか、ということが一つあるのではないでしょうか。

音楽を聞いてもそうです。例えばある時期からみんな格好付けることを憶えて、「御趣味は？」と聞かれると「クラッシックです」とこういうふうに言います。「モーツアルトはいいですね」とか「ベートーベンはいいですね」という話になります。ベートーベンでも「シンフォニーの第５番がいい」とか、「いやいやピアノソナタがいい」とか、そういう話になります。あるいは春になってきましたから、「ビバルディの四季の春、いいですねえ」とか、四季のインベンションの旋律のからまりがいいですねえ」とか、そう言ってたら無難ですよね。一見高尚に聞こえます。本当にモーツアルトを聞いて、ベートーベン聞いて、ビバルディを聞いて涙が出ればそれでいいんです。そうでもない人が上手に喋ることばっかり覚えたって、そんなものはなんでもないのですよ。

私もビバルディ好きです。モーツアルトも好きです。ベートーベンもピアノソナタが特に好きです。私も幼稚園の時から１８才までピアノやっていたもんですから。しかし私にとってもっと好きなジャンルがあるということに気がついてきたんです。

私はベートーベンではなかなか涙は出ません。しかし、石川さゆりを聞きますと涙が出ますね。特に離婚した後の石川さゆりはいいですね。あれはやっぱり素晴らしいと思ったりします。家中では顰蹙の的なんですけれども桂銀淑も好きです。御存知ないかもしれませんけれども桂銀淑という韓国の歌手がいて、日本で活動しています。私はテープを持っていまして、気が滅入っている時など私の研究室でがんがんかけているんです。そうすると、学生が入って来て「また桂銀淑ですか」と言ってますけれどもね。五輪真弓もいいですね。五輪真弓は去年か一昨年、五輪真弓のお父さんが亡くなられたときに、お通夜の席で２時間くらいお話する機会がありました。テレビで見ていると小生意気な感じがするでしょう？ところが素顔で見たら感じいいなあと思ってね、素直な子ですよ、より一層好きになりました。他にも好きな歌手があります。坂本冬美もいい。この人にはサインしてもらったもんだから余計好きになりました。音楽と違う話が入ってしまいますけれども、しかしやっぱり私にとっていいものはいいのです。

自分にピンとくる音楽の範囲をどうやって自分で探していけるかが勝負だと思うのです。私は演歌の中で８割から９割は嫌いです。だけどその中にも好きなのがある。クラッシックだからといっても、私になんの感興も呼び起こさないものもいっぱいあります。しかし好きなものもあります。カリブ海の音楽というのも私は大好きです。アフリカの音楽とラテンの音楽が融合していていいなあと思ったりします。だけれどもそれだって私にピンとこないものもあります。大事なのは何が私にピンときて、何が私にピンとこないか自分で知っていくことだと思います。自分の実感の世界を自覚していくということです。

絵だってそうです。私はフルシチョフは偉い人だと思います。ピカソの絵を見てロバの尻尾で書いたような絵だと言ったそうです。素晴らしい人です。自分の実感で物を言っているでしょ。普通は「ピカソ！そうですか。ちょっとわからんですけれども、やっぱりいいですね」とか「どことなくいいですね」とか言いますよ。それを言わないところがさすが大人物です。私も時々リトグラフを買います、カシニョールとかシャロワとか。カシニョールというのはご承知と思いますけれども、花と女の人しか描かない。カシニョールは日本でポピュラーになりまして、いろんな所にリトグラフがあります。三年ほど前にＮＴＴが株主にお詫びの印にテレフォンカードを配ったことがあるんですが、あれも図柄がカシニョールでした。私は安いときに二枚リトグラフを買いまして、これもわが家の他の人とは全然合わないので、私の部屋に空しく掛かっているんですが。他にもいろいろと好きなものがあります。ただ私はやっぱり絵を見る

時、号何万だから素晴らしいとか、何とかという賞をもらったから素晴らしいという見方ではなくて（私も人間だからそういう情報に振り回されがちな部分もありますれど）、自分にピンとくるかどうかで見たいなと思います。又私は自分の周辺の者にも、そういう風に言っています。それが自分の「実感・納得・本音」の世界を深めていく第一歩、入口だと思うからです。

自分にピンとくるものを大事にしなかったら駄目です。結局外の世界に振り回されてしまうんです。お墨付や肩書や値段や評判に。日本の歴史の中で自分にピンとくるかどうかで勝負したのは千利休ですね。千利休は庶民の使う普通の安いものの中から茶碗だとかいろんな道具を自分の好みで掘り出してきました。利休好みというわけです。見つけてきて、これを自分の茶事に使った。それだけじゃなくて弟子に何千倍何万倍の値段で売りつけたわけです。それが後に切腹させられるときの罪状の一つになってますけれども、あんなものを罪状の一つに挙げる方が恥ずかしいと思います。だって利休が自分で見つけた美なんですよ。それを欲しいという人がいたなら、それを何万倍の値段で売ったっていいわけです。利休好みであれば元が幾らであったっていい。もっともそれを意々諾々と何万倍ものお金で買う人というのも、アホな奴だと思いますが。

利休が利休の目で選んだ物に何万倍のお金を出して買うということではなくて、利休の姿勢自体を学ぶべきでしょう。自分で見つけるべきですよ。利休さんはこれをきれいだと思ったのか、それなら私も市場に行ってみようと。私はこれがいいなあと。これが利休からの学び方だと思うけれども、それだったら利休も商売になりませんから、そこまでは言わなかったのかもしれません。結局利休は自分の「実感・納得・本音」の世界を深めていった、そういう意味で本当の芸術家であったという感じです。

それでは「実感・納得・本音」の世界をどういうふうに深めていくか。ここではいろんなワークをやっておられますね、例えば体験は非常に大事だと思います。いろんなワークをやって体験をする中で自分の実感の世界が深まる。自分が今まで気づかなかったことに気づくようになる。あるいは自分の感情の動きにも気づくでしょう。そういうワークを通しての「実感・納得・本音」の世界の深まりがあるけれども、しかし、私はそこで申し上げておきたいのは、ワークに入る前にそこらの小さな小石も自分がピンときたら大事にしなさいということに気づかせておかないといけないということです。でないと偉い人が指導してくれたワークだから何かありがたいような気になるというだけになります。「ありがたやありがたや……」となる人がよくいるんです。

私は臨床をやりません。ときどき私に相談事を持ちかけて来る人がいたりすると、私は「何でそんなことで悩むんですか！」と言ってしまうから終わりなんです。本当は我慢して「そうですか」と聞いてあげないといけない。理屈は判っているんですが、やれる人とやれない人がいるわけです。私はやらないのですが。うちの研究室では若い人がいっぱいやってますんで、ケースカンファ

レンスなんかは時々私も出て聞きます。そういう中で時々感じるのは、ワークをしてもカウンセリングをしても、参加する人とかクライエントというのは心理的に非常に困って来ていますし、いわゆる自我の強さに欠けている人が多いから、下手をするとカウンセラーとかセラピストに依存させてしまうわけです。しかしそうなったらいけない。ワークをやることはとてもいいことなんだけれども、そのワークに参加しないと心が落ち着かない、ということになると、これはもう一種の麻薬です。だからそうならないようにするためには、このワークであなたがこれまで気づいていなかったあなた自身の感覚をどんどん掘り下げていってほしい、そこで見つけたことは一緒に参加した他の人と違うかもしれないがそれでいい、私は何を感じたのか、何を大事だと思ったのか、“私は”ということに徹底的にこだわってほしい、ということが大事になると思うのです。

4．他の人の「実感・納得・本音」に気づき、互いに尊重し合う

これに加えて、自分と全く「実感・納得・本音」の世界が違う人がいるということに気づいて、それをお互い大事にしあうということがなくてはならないでしょう。お互いが自分自身に対して忠実に誠実になっていったら、やっぱりお互いになかなか話が合わないことがずいぶん出て来るわけです。その時にお互いがどうやったらお互いの違いを大事にしていくことができるかということです。よく国際理解教育や同和教育において、一つのモットーとして、「お互いが違いは違いとして認識しながら、しかしお互い人間同士として認め合っていこう」ということを言うことがあります。この事を忘れてしまうと、誰が一番正しいのか、誰が一番まっとうなのか、という話になってしまいます。日本ではすぐそれが起こってしまうんです。

本当はみんな一人一人別々なんです。別の宇宙なんです。なかなか架け橋は掛からないんです。その事をお互い、しんどい話だけれども、腹に落ちた感じで判って、違いを違いとしつつ、お互いがお互いを大事にしていかなければなりません。そういう意味でカウンセリングなんかは、そういう修練の場として非常に大事だと思います。相手は自分と違う内面世界を話しかけてくれているわけです。腹を立てないでじーっと聞いてあげる。そこでは違いは違いとして認めざるをえなくなるでしょう。

例えばロジャースだってそうです。ある時まではクライアント・センタードだと言って、全部相手の言うことをそのままるごと受容するのが大事だと言っていたわけです。ところが晩年になってから娘さんが反抗するわけです。ナタリー・ロジャースは、お父さんのそういう考え方で育てられたから私はめちゃくちゃになったと言うわけです。そのために私は自分というものができなかった。受容するということばっかりやってきたから、自分というものが無くて、

結局は結婚生活も破綻してしまったんだ。そういうお父さんの理論の一番コアになる部分について反抗するわけです。しかし、ロジャースは偉いのです。そこで理論を少し変えるわけです。どういうことかというと、自分を無にして聞くんじゃなくて、やっぱり違いは違いとして自分の中に感じるということも大事にしていくというわけです。これはロジャースが亡くなったときの記念出版で、畠瀬稔先生たちが書いた『ロジャースとともに』という本の中に書いてありますね。私はあれを読んで、私も若いときからロジャースは読んできましたんで、「ああやっぱりロジャースは凄いなあ」と思いました。

それはさておき、この違いということ、違いを違いとして判り合いながら認め合うということ、お互いの顔の後ろ側にそれぞれ固有の世界があるということ、これはいつでも意識しなければいけないと思います。ここに１２，３人の方がいらっしゃいますね。皆さんがぐるっと廻りをご覧になると、皆この空間を同じように感じているだろうと、何んとなく思ってしまうものです。自分の感じていることをみんな同じように感じているだろうと暗黙のうちに思うのです。しかし全然違うんです。私には私の見え方、感じ方しかないのです。この空間は一人一人で違う見え方、感じ方をしているのです。

もっと言いますと、私の今日の話をどうお聞きになったか、みんな違うのです。同じように聞いていると思ったら大間違いです。確かに私の音声が皆さんの鼓膜をどういうふうに震わせ、どういうふうにそれが神経系で中枢にまで伝わっているかという点はかなり似ているかもしれません。そういう生理的なメカニズムは似ているでしょう。しかし中枢に達してから後が問題なのです。私たちは個人史を通じて、ものの感じ方、受けとめ方について一つの枠組みを作ってしまっています。それをインナー・フレイム・オブ・リファレンス（Inner Frame of Reference)「内的な準拠枠」と言います。いろんな受け止め方があるということです。例えば私のこういう喋り方をかったるいと思って聞く人もいるでしょう。いやこれはこれでなかなか面白いじゃないかと聞く人もいるでしょう。あるいは、むかし今日の梶田によく似た奴にだまされたことがあるという人がいたら、今日はだまされないぞとお聞きになるでしょう。あるいは自分の親戚にああいうのがいて昔から親しくしていたので、親しみがあるという人がいらっしゃるかもしれません。そういう風に一人一人の顔の後ろの世界はみんな違っているのだけれども、自分の見たもの、自分の聞いたもの、自分が受け取ったもの、自分が意味づけたものが皆の共有の物であるかのように思うから、そこに間違いが起こるわけです。

それでは違いを違いとして認識しながらお互いを大事にするにはどうしたらいいのでしょうか。この「違い」ということは非常に重い話だなあと、いつも思います。一人ひとりの違いを単なる相違というだけではなく、どこまで深く考えているか、どこまで脱自己中心的に考えているかというように、一定の価値の軸に沿って考えることもあります。例えば５０人の人が居るとすると、５

０人の中にはやっぱりいろいろと善いことを考えられる人も、つまり天使に近い方の人もいるでしょう。けれども同時に、５０人もいれば、頭の中が、顔の後ろが豚に極めて近い人もいるかもしれません。５０人もいれば天使から豚までいる。そうした違いをもってお互い世界を見て、感じて、考えているということを前提に、人間についての理解を深めていかなければいけないと思います。

こういうことを学生に言うと、最初は大抵反発しますね。私は自分の講義とか演習の後には必ず紙を配ってコメントを書いてもらうんです。それを全部ワープロで打って次の時間に返すんです。何を書いてもいいんです。一行でも五行でも五十行でもといい言います。で、私が「豚から天使まで」といった話しをした後などには、よく「豚として言わせてもらえば……」なんていうコメントが出て来ます。しかし、それだけの違いがやっぱりお互いの間にあることを大前提にしなくてはいけないのですけれどね。

ということで、「実感・納得・本音」の世界が希薄になっていはしまいか、ということを本当に考えてみなればいけない。同時に「実感・納得・本音」の世界をどうやって深めていくか、あるいは関わりを持っている相手に深めさせていくか、という課題があります。もう一つ「実感・納得・本音」の世界の違うもの同士がどうやったらうまくつき合えるか、を考えなければならない。

５．一人称・二人称・三人称の人間学

ここまで考えてきますと、人間研究には一人称のもの、二人称のもの、三人称のものがある、という話になってきます。一人称の人間研究とは何かというと、自分自身のことがわかるということです。ここでは自分史を書かせたりなさっているそうですが、これはとてもいいことだと思います。自分というのは一番わかりません。だから一人称の人間研究を私たちはもっとしなければいけないのじゃないかと思います。

ご承知の主我と客我という話がありますが、ヨーローッパ的な主我と客我の話だと、どうしても認識論的なものになってしまいます。つまり私というものについてどんどんわかっていって、しかしどうしても最後にわからない一点が残る。私にとって把握できない一点が残る。これが主我(I)である。分かった部分は客我(me)であると。ヨーロッパ的な発想、特にデカルト以降こういう言い方がよくされてきました。

私どもはこれは全く間違いだと言うんです。これには大きな考え落ちがある。私たちは、これを逆転しないといけない、と考えます。

私たち自身について、折に触れてわかって来る部分は確かにあります。こうやってしゃべっている最中にも、私の頭の中では記憶だとかここの状況把握だとかいろんなことを総動員していて、フルに動いているはずです。でもそれは私にはつかめていません。私につかめているのは殆ど皆さんと同じで、私の口

から出てきた言葉だけです。これしかつかめてない。あるいはこうやってしゃべっていても、心臓は心臓で血液を送り出していますし、肺は肺で呼吸をさせてくれてます。あるいは延髄あたりでは体温コントロールやいろんなことをやってくれてます。しかしほとんど自分ではつかめていません。自分のことは自分が一番わかるという人がおりますけれども、そんなことは真っ赤な嘘というか、自分の無知蒙昧ぶりをさらけだしただけの話です。このわかっていないが確実に働いている部分が主我(I)。その働きの中のごくわずかですが私自身にわかっている部分が客我(me)です。こういった見方を私どもは適応論的な主我と客我の捉え方と称します。

いずれにせよ、私というものを本当に探検していかなければならない。私の内面的な世界も、あるいは周囲の人との関わりも、私が世界の中にどのような形で存在しているかということも、いろいろ探検していかなければいけない。それによって少しずつ、しかしそれほど大きくなるわけではないでしょうけれども、この客我(me)の部分が広がっていきます。これが一人称の人間学、一人称の心理学ということになっていきます。

こういう自分への気づきというのは、古代ギリシャの時代から大事にされてきたと言われております。ミシェル・フーコーの『自己のテクノロジー』という本によりますと、古代ギリシャの貴族階層の青年は、三つのことをやることを義務づけられていたというのです。

一つは日記や手紙を書くこと。日記や手紙を書きながら自分の事が自分自身に見えてくる、といった自己開示です。自分自身についていろんなことが、そうした反省的記述を通して見えてくるというわけです。森有正の『バビロンの流れのほとりにて』をお読みになった方がおられると思いますが、あれを読むと、手紙形式で自分の内面にある感覚や気づきを自己開示していると思います。

二番目は、時間を決めて夕方に自分自身を省みる時間を持つということが義務づけられていたということ。カトリックだと夕べの祈りの中で一日の反省をするわけですけれども、あれは実は古代ギリシャからやっていたわけです。神に対し人に対して、というような感じでしょうね。自分の思い、言葉、行い、怠りによって罪を犯すことはなかったか、と反省してみることによって、自分自身のあり方が見えて来るわけです。これは日本の海軍でもやっていたわけですね。「我何何にもとるなかりしや」というような反省をするということをやっていたわけです。これはみんな古代ギリシャに発する伝統だというわけです。

三番目は、架空の事態を想定してみて、自分がそういう場合にどういうふうに行動するだろうかということを自分で考えてみること。例えば、もうあと一週間しか命がないと医者から宣告されたときに、私はまず何を真っ先にやろうとするだろうか。普段はそんなこと考えることもないでしょう。つまり私たちは日常性の中に埋もれ込んで生活しております。そうしますと、自分自身が本当に何を本気で大事にしているかにも気がつかないわけです。昨日の続きに今

日があって、今日の続きに明日があってという生活をどこかでパーンと切ってみて、まあ一種のシュミレーションですが、もしこうだったらどうだろうかと自分自身の内側から出て来る声に耳を傾けてみる。例えば、もし自分が死の宣告をされたら、ちゃんと身辺を整理して、周囲の人に「みんなありがとう」という手紙を書いて、自分が何をこの世でやってきたかという若干の反省を書いて、そして潔く従容として死につきます、なんて普段だったら思うかもしれませんし、自分の思いを人にもそう語るかもしれません。しかし、本気で考えてみると、「後一週間しかないんだよ」と言われた途端に「あー」と思いますよね。それなら台湾の何とかという料理はおいしいという話だけどまだ食べてない、これはさっと行って食べてこようかなとか。忘れてたけど１０年前にあいつにああいうふうに言われたけど、やっぱりこのまま死ねないな、どうせ死ぬんだから行ってひとつブスッと刺して来ようかなとか。いろいろと眠っている自分の内側の本音的な欲求がこみ上げて来るかもしれません。自分の内側にどれだけどろどろしたものがあるかということは、架空でいいけれどもせっぱ詰まった状況に時々自分を置いてみないと見えない部分がいっぱいあります。人間なんてそんなにきれいなものではないから。頭の先っぽでイメージしているところだけきれいなんですよ、どろどろしているのが人間なんです。

今言った三つ、日記とか手紙での自己開示、時を決めて毎日おこなう反省、架空の事態に自分はどうするだろうかという想定、という三つで、自分自身についての認識を育てていこうとしたわけです。

もちろん日本にだってこういうことはありまして、普段は本当に自分のことを振り返ることなしにやっておりますが、例えば浄土真宗の流れでは身調べといいまして、囲いの中に入って「自分は誰に何をしてもらったんだろうか」ということを思い出して点検していくということをやります。そうした誰かからの好意に対して「私はその時にどういう気持ちだったんだろう、ちゃんとお礼の気持ちや感謝の気持ちを表したんだろうか」と受けてきた援助だとか恩になったこととかについていろいろと考えてみると同時に、自分の側から感謝の気持ちを持ってきたんだろうかということを考えてみるわけです。これを三日も四日もやるわけです。それをやっている中で普段の生活の中で見えなくなっていた自己中心的な自分のあり方に気づいていくということになるのです。

人間はほっておくとすぐ天動説になってしまいます。自分の周りを太陽も星も回ってくれて当り前だと思うのです。ところがやっぱり本来は地動説にならなくてはいけないでしょう。一人一人が自分なりの宇宙を背負っていて、それがいろんなご縁で触れ合って、援助し合ってお互いに感謝し合ってやっていくということに気づかなくてはなりません。私を中心に全てが動いているということではなく、いろんな動きの中で私もその一コマとして動いているのだという地動説へと変わらないといけないのです。コペルニクス的な転回が必要なのです。それを真宗では身調べという形でやらせたんです。こういったさまざま

なことを通じて自分というものが見えていかなければいけない。自己認識、これが第一人称の人間学です。

第二人称の人間学とは何かというと、私とあなた、我と汝という世界の中でお互いが関わりを深めていく中で、お互いが自分についてもわかっていく、相手についてもわかっていくということです。これはブーバーが言ったことでもありますし、あるいはカウンセリングなんかでよく言われることでもあります。ロジャースだって、関わりの中で相手も変わるし、自分自身も変わっていくということをよく言います。これは本当にお互いが相互に心を開き合う中で、ということです。本来はあらゆる関係がそうならないといけないのかもしれません。特に師弟の関係はそうでなくてはならないでしょうし、夫婦の関係もそうでなくてはならないでしょうし、親子の関係もそうでしょう。でもひるがえって考えてみると、私など全部駄目なような気もします。近しいからよけいに開き合えないというところもあるように思います。私にとっては今まだ駄目かもしれませんが、課題として言いますと、この我と汝という中で第二人称の人間学を成立させないといけない。つまりまさに異質な世界を持っている人が、ご縁でもって私と共に生活をするようになったとか、私と共に学習するようになったとか、私と共にこういう場を共有するようになったとかいうことがあるわけでしょう。まさにご縁ですよね。

ご縁というのは、私も段々自分で実感で感じるようになってきました。学生とただ話していて、何でこいつがここに来ないとけなかったのだろうか、と考えると、さしたる必然性はないわけです。2年も浪人して、たまたま受けたこの大学に入って、２４研究室があるけれどもたまたま最初に講座訪問したらそこに話の合う先輩がいて、…といった、たわいもないことですよ。しかし、そうやって一つご縁ができて、例えば私が指導教官になるとします。そうすれば私は言わんといかんこともあるだろうし、その子のことを理解していかないといけないわけですね。ご縁です。

もっと言うと結婚するなんて本当にご縁でしょう。よく教会の結婚式で「愛は……」なんて読み上げるでしょう。私も時々結婚式であれを朗読させられたりします。しかし愛だなんて言っているからどうにもならなくなるんだと私は思います。愛なんて2年続けばいい方で、でもご縁だったら一生続くわけです。喧嘩してもご縁はご縁。憎み合ってもご縁はご縁なんです。もちろん本当言うと聖書の言っている愛というのは普通我々が常識語で言っている愛ではないのですけどね。でもすぐキリスト教は愛の宗教と言われて、ほんわかムードでにこにこしていないといけないような話になるんですが、キリストの一番キリストらしいところというのは、神殿に行って屋台をみんなひっくり返して来るところではないかと思ったりするんですがね。日本風のふわふわした愛であったら、何で神殿の屋台をひっくり返して回りますか。キリストというのは怖い人なんです。それはさておき、やっぱりご縁なんていうのはそれと全く違って完

全な受容なんです。無条件の受容なんです。憎み合っても縁は縁なんです。師弟関係も、親子の関係も、夫婦の関係も、あるいはいろんなことで一緒になった、職場で同僚になった、という関係も、そういうことなんだと私は思います。そういう中で、お互いがお互いに対して、そういう関わりをベースとして異質な世界の理解を深めていけるか、これが第二人称の人間学ということになるでしょう。

今申し上げた第一人称と第二人称の人間学なり心理学なりを土台にして初めて第三人称の心理学・人間学というものが成立するというのが私の申し上げたかったことなんです。つまり人間について何もわかってない人が、「いやこういうテストをやったらこうだったから、こうこうであるに違いない」とか「こういう実験をしたからこうであって‥‥」というのは私の今の感覚から言うとまさに噴飯ものなのです。

結局本当の人間学や心理学が成立するとすれば、自己理解を深めていって、それから自分にご縁があった人、そういう具体的な人間に対する理解を深めていって、それがベースになって一般に、例えば自分というものの位置づけ、ご縁のあった誰誰さんとの位置づけ、これがもっと広い中でどういうふうにできるのだろうかと考えてみるわけです。非常に素朴に言えば、「そうか、私は血液型B型。そしてたまたま私のご縁のあった人はみんなB型。だから人間ってこういうもんだと思っていたけれども、よくよく調べてみたら、O型の人は発想や感覚が違っていたし、A型の人も違ってた」とか、そういうのだっていいと思うのです。

広い中で位置づけたときにどうなるかということがわかるためにも、自己理解という第一人称の理解と、ご縁のあった人についての第二人称的理解だけだと偏ってしまいます。やっぱり人間というのは極めて多様です。そういうことから、三人称の人間学をやるための方法論というのが出てくることになるわけです。自分と実感の世界の違う人もこういう順序で示されればこれは納得せざるをえんなあという、そういう物事の示し方というのはあるでしょう。これがいわゆる方法論と言われているものです。だから、本当に深い世界だけを言うんだったら独白でいいのです。深い世界を持っている人の独白しか深い世界を指し示すことはできない、と言ってもいいのです。あるいは、お互い我と汝だけの関係で言うんだったら、お互いがお互いの中で理解を深め合えるだけでいいのです。しかしもっと一般に、実感の世界が非常に違う多様な人を対象として、これだけはお互い共通の認識として土台に持っていけるんじゃないかということを言うためには、やっぱり方法論が必要なのです。私は心理学を学んだことによって、方法論ということでは非常にいい勉強をしたと思います。

「一人称・二人称の人間学を土台にして、三人称の人間学を」ということでお話ししてみました。第三人称の人間学なんて必要ないと、私には第一人称と第二人称の人間理解だけでいいという立場もあるかもしれません。しかし社会

というのは人々が互いに第三人称として関わりを持つものです。そこでの共通な認識的土台は、やはり第三人称的なものでなくてはなりません。その意味において、学問というのは基本的に第三人称的なものです。しかし、そうした三人称の人間学・心理学を作るならば、一人称二人称のそれを土台にしなければ駄目だということを繰り返し申し上げておきたいと思います。

伊藤：どうもありがとうございました。とても分かりやすく話して頂きました。どうぞ皆様方の方からご自由に‥‥どなたからでも結構です。

附１．自分は自分自身の主体であるのか

梶田：ちょうど伊藤先生がこれをお持ち下さったんですが、今年の一月に出た『現代のエスプリ』が「自己という意識」という特集でして、私が編集しておりますのでご覧頂くと有難いと思います。これは今日話したことのもっと土台になる私の人間観を最初の所で語っております。それは何かというと「自分という主体は無い」ということです。

私は今喋っていますが、喋っているからには私の頭の中も働いているでしょうね。もし私が自分の頭の構造を、自分でこういうように機能させるという風に作って、その上で自分が喋っているのだったら、これは私という主人公が私の責任で喋っていると言っていいかもしれません。もちろん社会的には私は主体であります。主体ということは責任の主体、権利・義務の主体、つまり主人公なわけです。社会はそういう共通の約束ごとの中で成り立っているわけです。

けれども、そもそものところを考えたら、私は自分の作った装置で話しているわけじゃない。遺伝子が作ったのか何なのかは知りませんけれども、作られた装置によって、そして与えられた環境の中で、与えられた関わりを持ちながら育ってきて、その中で言葉を学んで、学んだといったって私が学んだというよりもそういうインタラクションの中で学んできたわけで、そういう土台の上に立って今私は言葉をつむぎ出しているわけです。

そうすると、「私が」というけれども、実は「私が」じゃないのですね。「私が」という意識をお互い持っているわけだけれども、そもそもから言ったら私は主人公でもなんでもないわけです。文学的に言うと、永遠の妖精が「私」という夢を見ているだけかも知れない。もっと言うと、「私が」というんだけれども、存在論的にいったら私はこの物であったっていいし、別の物であったっていいし、まどかさんに替わったっていいわけです。そういう意味では、お互いに「私」という社会的な約束ごとの中で「私」「私」とやっているわけです。

ではどうしてそういうふうになるのか。ヤスパースは主体としての意識を支えるものとして四つの要因があると『精神病理学総論』の中で書いています。能動性の意識、自我の単一性の意識、自我の同一性の意識、外界や他人に対す

る自我の意識の四つです。そういう事があって初めて私は私の主人公であるという主体性の意識が成立するわけです。だけどもそれはあくまでも意識であって、存在としてはそういう意識を与えられているだけなんです。

そうすると私というものは本当は無いわけだけれども、そういう意識を与えられて私という形でやっている。そういう時に今度はその私というものをどうイメージしていくかということで、公理的なものがあるわけです。ユークリッドとか非ユークリッドとかと同じで公理系があると考えられます。例えば四つだけここでは挙げているんですけれども、公理の１は、自分は独自の個体（独立した有機体）として存在する。２は、自分は自分自身が主人公であり、自由意識による自主的判断を行う。これも公理なんです。公理というのはどういう意味かというと、日常的にはこれらを自明の真理であると信じ、暗黙の大前提として生きている。けれども、こんな自明性・真理性なんていうものにはなんの根拠もないわけです。さっきも言いましたけれども、そういうふうに自明だという意識があるだけなんです。だから公理なんです。

それから公理の３は、自分は生まれてから死ぬまで一貫して自分自身である。これは本当は違っているんですよね。身体を構成する細胞そのものは殆ど入れ替わっているし、細胞を構成する元素なんていうのはもっと早く入れ替わっているんです。でも例えば、私は今から３０年前この南山教会に来たなんていう事をなぜ思うかというと、これはあの時の私と今の私とは同一で一貫しているという公理系の中で考えているからです。

これをもっと社会的な文脈の中で言ったら一般意味論のＳ．Ｉ．ハヤカワのように、人というのはどんどんどんどん変わっていくから、誰誰さんなんて言ったらいけない。誰誰さん千九百何年何月何日と言わなければいけないということになります。そうしないと話が混乱するというんです。誰誰さんは常に同一で一貫だ、なんていうのは迷いだと言うんです。

それから公理の４というのが、自分は出生以前には存在せず、死と共に消滅する。これも公理ですよね。この４つの公理を出しています。私たちは、こういう公理系の中で自分についてのイメージを形作って生きているわけです。

ところが公理をちょっと変えると、自分のイメージは全く変わって来るわけです。公理の４をちょっと変えると、自分は出生以前には別の個人の形で存在していたし、自分の死後もまた別の個人として生まれ変わっていく、というものになるでしょう。こう考えられたら面白いですね。前世のことがよく当たるという人がいるというんで、私はああいう話は好きなもんですから、お金を包んでみてもらったんです。直接には会ってないんですけれども。そうしたら私のいろんなことを調べて、私の前世は江戸時代の田舎の貧乏な神主だったとおっしゃるわけです。で、若死にしたんだそうです。それで何か思いが残って、その生れ変りが私だそうです。だから、あまりぱっとはしないわけです。だけれども宗教的なこととか、そもそもとかを考えたがっているのは、この若くて死

んだ田舎の神主さんの生れ変りだからだと言うんです。そう言われてみるとなるほどなと思ったりしますけれども、まあ、どういう公理系で考えるかです。この辺の事はあんまり考えると、頭が混乱するかも知れませんけれども。

実を言うと、西田幾太郎の哲学をお読みになるときに、私がいまいったようなことを若干お感じになるかも知れません。禅のいろんな話についても、そういうふうにお考えになるかも知れません。親鸞も、「もようされて生きる」と言いいます。親鸞は法然の弟子ですね。あるとき法然の弟子の間に議論が起こるわけです。一回南無阿弥陀仏を言えば極楽浄土へ行けるのか、それとも沢山言った方がいいのか。一回言っただけでいいというのは一念儀、沢山言った方がいいというのは多念儀と言うわけです。それで喧嘩を始めるわけです。多念儀の寺が京都の百万遍念仏寺ですね。百万遍言った方がいいというんです。ところが親鸞はどっちでもいいと言うんです。一回言えばいいとか百万回言った方がいいと言うのはそれは全部自分が言ったと思って唱えているからなんで、親鸞に言わせると、それはもう根本が間違っていると言うんです。南無阿弥陀仏というのは、その時の意識の状態では、自分で言っている訳なんだけれども、その時にそういう意識の状態にさせてくれたもっと大きな力があるわけなんです。南無阿弥陀仏とでも言ってみようかなというのは、大きな力にもようされてそう思わされるのだから、それが一回起ころうが百万回起ころうが結局は同じことじゃないか、と言うんです。大きな力がそういうふうに差し向けてくれたんなら、南無阿弥陀仏というのは感謝の祈りだというわけです。こういう気持ちにさせて頂いてありがたいなあ南無阿弥陀仏というわけです。

これは私の先に申し上げたことと似ているでしょう。個が主体であるということは、実は一つは社会的な約束ごとであり、別の側からいうとその人の思い込みであるという、いずれにせよ幻想の世界の話なんです。しかしその幻想が単なる幻想ではなくて、「もようされて」というのは、私が生きているんじゃなく大きな力の一つの個別的現れとしてここでこうしているというのがいいんですよ。こうした見方は意見の問題でなくて事実の問題だと私は思うんです。私が生きているんじゃない。私は生かされて生きている。これは事実の問題です。

例えば、今だって私の器官や機能がまわってくれているんので、生かされているんです。夕方になって大きな力が「もう止めた」といって活動を断念したら、まだ困るなとこだわりがあったりします。そんなことをこの本の始めの自己と意識という所に書いてあります。

読んでもらうと面白いのは、学生たちが書いたコメントの部分です。「私は私自身の主人公ではない」なんてことを研究室で一気に２４，５枚ワープロしたんです。で、その辺にいる学生とか院生に配ってコメントを書けと言ったんです。それを収めております。『現代のエスプリ』を読んだ何人かの人からレスポンスがきまして、皆共通しているんです。まず私の文章を誉めた人は一人

もいない。このコメントの所がいいと言うんです。学生のコメントが編集としてアイディア抜群と言ってくれたのが東洋先生。中身が面白いという形で言ってくれた人が何人か。コメントは面白いですから読んでみて下さい。私が今申し上げたようなことを、例えば三年生がどう受けとめたか、四年生はどう受けとめたか、それから大学院生は、研究生は、と言うことです。中には熱心なプロテスタントもいますし、カトリックもいます。ちょうど１０日間座禅して帰ってきたばかりという学生も書いてくれています。これを読んで頂くと有難いと思います。私の今日話したことの出発点みたいなことがお判り頂けるかも知れません。

山口：出発点の話のほうがなんか面白そうで、買わないといけない様な羽目になりそうですね。有能なセールスマンの話しのようなと言うか……。

梶田：ただよほど大きな本屋さんでないと『現代のエスプリ』は売ってないと思いますよ。そこが残念なんです、セールスマンとして言いますと。大日本図書の『内面性の心理学』の方が売っていると思いますから、もしチャンスがあれば読んで下さい。

附２．「現象としての私」が「生き生きと」生きるということ

梶田：もう少しお話すると、例えば道元が出している例があります。一陣の風が吹いて鈴がチリンと鳴る。これは何が鳴ったのか。風が鳴らしたのか、鈴が自分で鳴っているのか、それとも私が聞いているからその音があるのか。いずれでもない。風と名付けられた事象と鈴と名付けられた物象と私と名付けられた心象、これがある出会い方をした。そういう世界の中で鈴の音という現象が成立するわけです。道元はこういう親切な解説はしません。「風鳴に在らず鈴鳴に在らず心鳴に在らず鳴々なり」と言うわけです。鳴々と言うのは、鳴るという事実があるだけというんです。

人間についてもそうなんです。いろんな考え方ができますけれども、最後はある一つの現象として一人一人がいるだけと言っていいかも知れません。しかし、現象としての人間がまた面白いわけです。せっかく私という意識があって、私の人生とか私が生きるという意識があるならば、それにこだわって、もっと生き生きわくわくと生きた方がいいじゃないか、ということになるでしょう。じゃあどうやったらより生き生きするか、よりわくわくするか、という話になります。そのためには「手を叩かれても木にのぼっちゃいけないな」とか、「私にピンとこないのにベートーベンは素晴らしいと相づちうっちゃいけないな」という話が出て来るわけです。じゃあそのことにどうやって気づかせていくかということで、例えば教育の中で、あるいはワークとか、いろいろ考えてみなくてはならないということになります。そういう気づきがなくては、ワークやらカウンセリングやらで気は軽くなるかもしれないけれども、根本的には

変わっていかないわけですね。自分の「実感・納得・本音」の世界にこだわるということに気づいてもらわなければ駄目だと私は思います。

ですから土台のところから今のところまでどうやってつなげて考えるかということが課題となります。人間の事なんてお天道様のもとに新しい話はないんです。だいたい心理学も易しい常識的な話を難しい言葉で語ってるだけだという気がします。ただし、宗教の話は、私たちが常識的に、日常の意識の中で持てないような事をどうやって考えていくかということがあります。本当いうと学問も、体験性からいく宗教とは違って、もっと頭を使いながら、しかも三人称の人間学ということを申し上げたけれども、誰でもあるステップを踏んでいったら、うんなるほどと頭で納得出来る体系を作り上げなくてはならないのです。だから学問としての心理学は、本当に易しいようで、実をいうと大変なことになるのです。その意味でいいますと、日本の学問は駄目ですね。欧米の研究の動向や成果を輸入紹介するのが学問だと間違えています。だから日本の大学のやっていることは蛮書取調所ですよ。認識そのものが自分の内側から出てこないから、結局はそれを自分でつかみなおして教育の中で本当に伝えていくということは難しいと思います。

で、人間学・心理学の土台になるところはまだまだ他にもいっぱいあるでしょう。もう少し内面世界の問題を考えなければいけないですね。例えばライプニッツが言った「モナドには窓がない」ということもあります。一人一人に固有で独自の自分の世界がある。自分の感じ方があるでしょう？隣の人の目を借りて見るわけにはいかないし、隣の人の肌を借りて感じることもできませんよね。まさに、「冷暖自知」です。そうすると、自分が感じている世界、自分がそうだと思っている世界は、自分限りのものです。けれども、そうした土台に立ってコミュニケーションしていくということはどういうことなのか。ご縁があって関わりを持った人に自分が大事だと思った何かを伝えるということはどういうことなのか。これがまた実際の話なかなか難しいと思います。そうしたコミュニケーションを可能にするものとして、私も三つくらいこの本の中で言っておりますけれど、端緒というだけの話で決定的なものは出てきません。結局は私は私の世界の中で生まれて（気がついていないときは私はないわけですから、気がついて初めて私の世界が成立する）、そしてある日私はなくなるわけです（私に気がつかなくなり、私の世界もなくなるわけです）。そういうことで私は私の世界の中で一生渡っていくわけだけれども、そういう時に別の世界の中に生まれて別の世界を旅している別の人と出会うわけで、どういう形で関わっていくかが問題となるわけです。とういうわけで他の人と関わるというのは簡単な話みたいだけれども、実はこれはすごくしんどい話になってくるのです。

附３.「気持ちの持ち方」の重要性・基盤性について

中野：難しい話で、うまく頭の中が整理できてないんですけれども。私という意識の公理系しかないんだという話だと、違う固有の世界を持った人というのもある種の幻想ですね。そしてその違う人をそういう風に尊重しろとかおっしゃいましたけれども、その必要性というか、してもしなくても同じじゃないかという感じですよね、言ってらっしゃることは。

梶田：そうです。幻想というような言い方をするとき、いくつかレベルがあると思うのです。完全に荒唐無稽という幻想もあります。今日私が申し上げた幻想というのはそういうものでなく、ある基盤的な認識にかかわるものです。もちろん幻想ですから、どう考えてもいいという自由度はありますが、それが幻想であるということ自体は一つの認識なのです。そういう中で他の人とどうかかわるか、という問題がでてくるわけですが、これも具体的な形としては、どういうものであってもいいわけです。しかし、ご縁のある人には実感としてその人を大事にしなくてはいけないという気持ちが出て来るわけです。これは論理的な必然ではなくて心情的な必然です。そうすると私がある心情的な必然を持ってこの人と関わりを持ってこの人を大事にしなくてはいけないと思うこと自体は確かに頭の中での公理系にかかわるものですね。必然性はないかもしれないけれども、心情的にそういうことがあれば、これは非常に大事なことだと思います。私は自分自身を大事にするのと同じレベルで、関わりを持った人を大事にしなくてはいけないと思うんです。自分を大事にしなくていいという実感を持つようになったら、例えば自殺をしようなんて思うんだったら、他人どころじゃないでしょ？それはもうすべてが崩れている世界だと思うのです。

中野：それは気持ちの問題だよ、ということ？

梶田：そうそう、気持ちの問題なのです。私はこの本にも書いているんですが、気持ちの問題なんです。実を言うと気持ちの問題が人間にとって一番大事な問題なんです。

例えばちょっと視点を変えて考えてみましょう。今我々は現役ですね。現役だからこうやって会って、いろいろ役割を持ちながら話をします。しかし早晩７５になる、８０になる、８５になる。そうしたら現役を引退する日がくるわけです。そして下手をすると、金さん銀さんまで百才まで生きます。するとどんなに考えても１０年とか１５年とか２０年は、私たちはなんの役割もなく、課題も仕事もなく、裸の人間としてやっていかなくてはいけないでしょう。その時に自分を支えるのは何かと言うと、自分の気持ちでしかないのです。元何々でしたと言ったって誰が大事にしてくれますか？「私は元学長でした」と言ったって、「そうですか、お大事にね」と言われて終わりですよ。覚えてくれているのは退職後せいぜい２年、長くて５年ですよ。皆さん老人ホームへ行ってご覧なさい。私は今親父が郷里の松江で特別養護老人ホームに入っているので

よく行きます。すると島根県の何とか部長だったとか、島根県の何とか警察の署長で飛ぶ鳥を落とす勢いだったとか、そういう人がみんな入っているんです。しかし単なるおじいちゃんです。本人も元何々だったということを頼りには生きられないし、周りの人だってもうそういういうことではないわけです。私の家内のお父さんも京都の近郊の老人ホームにずっと入ってましたんで、よく行きました。１０年以上老人ホームにずっと行ってきて、いつもそう思います。つまり世間的な世界で役割がなく、肩書がなく、仕事がなく、課題がなくなったときに自分を支えるものは自分の気持ちしかないのです。

私どもは自分なりの実感の世界、納得の世界、本音の世界ができていて初めて内的な促しができてくるんです。内的な促しがなければ生き生きもわくわくもありません。誰が何と言おうと、もう一花咲かそうか、恋でもしようか、くらいのつもりがないと、たくましく生きていけないでしょう。逆に「自分は元何とかだったけれども今では誰も大事にしてくれない」といって愚痴を言っている人はいっぱいいるわけです。やっぱり最後は気持ちの問題だと思うんです。現役の時は肩書がほしかったりします。大きな家が欲しかったりします。場合によったら勲章が欲しかったりします。大きな表彰をしてもらいたいとか、あるいは自分で何冊本を書いたとか、幾つ論文を書いたとか、そういう目に見える形で自分を支えるものが欲しいと思います。そんなものは老人ホームになったら全部ナッシングですよ。そんなものはなんの意味もないんです。その時に内側から燃えるものがあるかどうかなんです。

例えば芹沢光治良、フランス文学者で作家ですね。９０才になってから毎年一冊づつ小説を書き出して、今５冊か６冊出ています。私もずっと買って読んでいるんですが、あれをお読みになって下さい。あの人は前に朝日新聞に書いていましたけれども、自分は８０幾つで完全に自分の人生は終ったと思っていた。体も衰えたし、頭も働かないし、どうにもならない。ところが９０の時に何か体験したんです。どうも宗教的な体験だったんですね。それで彼は蘇って毎年一冊づつ小説書いているんです。私も読んで面白い。ただし、庭の木がしゃべり出したり、ちょっと変わってますけれどもね。ですから文芸評論家がみんな困ってますね。あれはフィクションとしてそう書いているのか、本当にぼけてしまってそう書いているのかわからないと。しかし、小説そのものとしてはぴしっと構成もできてますから面白い。これが気の持ち方の問題なんです。

気の持ち方なんかどうだっていいなんて思ったら大間違いです。最後は気の持ち方。これはフランクルも書いてます。強制収容所に収容された人は絶望のためにどんどん死んで行くが、ある房の人たちだけがいつまでも生き生きしていたというんです。どうしてか？　男ばっかりの狭い房に押し込まれているので、お互い約束ごとを作ったというのです。この房には「目に見えない素晴らしい美しい女性が一人いると考えよう」と申し合わせしたというんです。その女性に見られているからということでお互い行儀もよくするし、いろいろ身だ

しなみもする。これは正に気の持ちようですが、その房の人だけは生き生きしていたというわけです。だけどその事に看守が気がついて、「おまえらの房には女性がいるという話だけれども出せ」と言うのです。その人たちは、「実はいるんです、どうぞ連れていって下さい」と言った。連れてけと言ったって実在しないわけですから連れて行きようがないわけです。

フランクルが『夜と霧』でも他の本でも一貫して書いているのは、結局私たちは意味の感覚がなければ生きれないということです。意味の感覚とは何かを普通の言葉で言うと、気の持ちようなんです。単にお饅頭を食べるのではなくて、ありがたいなあと思って食べるという問題じゃないかと思うんです。

私はもし心理学を再興するとすれば、気の持ちようの大事さを研究していくことだと思うのです。ワークだとかセラピーだとかカウンセリングでも、気の持ちようでいろんなものが新しく見えてくるし、新しく感じれるようになるということではないでしょうか。これを体験させることができればその人にとっては大きな自己発見になるんじゃないかという気もするんですけれども、この辺はなかなか意見の合わないところがあるかも知れませんがね。

附4．神の視座をめぐって

中野：それで、話は顔の後ろの世界があってそれにこだわっていくという筋でずっと来ていて、いわゆる本音と建前とか表面と背面の世界というか、そういう風な外と内という枠組みを、とりわけ社会的な場面を表側という風に仮定する中ではすごくよく分かるんですけれども、一番最初の話と僕の中でどうしてもつながらなくてまだ納得がいってないことがあるんです。

それは、私はラディカル・カトリックだった、ということをおっしゃって、精神という世界というんでしょうか、それはそれでこちら側にぽんと置かれたでしょう？たとえぽんと置いても、生きている人間にとっては顔の表も後ろもやっぱりつながった問題領域なのではないかと思うのです。例えば、神というのを仮定的に想定すると、これはヨーロッパ的な神観ですけれども、そうすると要するに神の前においては顔の表も裏もないわけですよね。そういう識別点というのは、人間がある意味で言ったら勝手にやっている。そうすると神の目とか、あるいは神という存在というのはいったい人間論とか人間研究とかいうものを考えていくときにどこに見えてくるのか。今の話だと一人称二人称三人称のこの人間観の中でもなかなか見えてこないというか、社会の中で人がどう動くのかという範囲だけだとすごくよくわかる話だったんだけれども、僕には全然よくわからない話でした。というか最初のセッティングがまだ終っていないという印象が残っています。

梶田：なかなかそこは難しいですね。ただ表も裏もつながっているんです。そして神様から言うと、丁度良寛さんが死ぬときに言ったように、「裏を見せ

表を見せて　散る紅葉」なんですよ。紅葉は裏を見せて表を見せているわけですが、私たちは表だけで生きようと思うから、表だけ人に見せよう、表にこだわって生きようと思うから、自分の裏の面が生きられないままに、光と影で言うと影の部分になっていることが非常に多い。ま、そういう事なんです。

私は、顔の表側と裏側と言ったわけですが、実をいうとこれは社会的な面と内面的な面ということとはちょっと違うところがあって、例えば鏡で自分の顔を見たとしても、通常これは表なんです。自分だけの時にも表と裏があるんです。例えば「ぼろを着てても心は錦」と言うけれども、これは表と裏がはっきりした感じですね。「ぼろを着てても」というのは表に見せている部分、あるいは表に見せているとして自分がこだわっている部分。「心は錦」というのは裏の話です。

確かに今申し上げた通り表と裏はつながっているんです。つながっているけれども、いったいどちらを土台に生きていくか、どちらを基準にものを考えていくか、ということです。それが私はラジカル・カトリックだということともかかわってくるのです。どういうことかというと、私なりに聖書を読むとキリストが一番教えてくれているのは生き方の問題なんですね。だからキリストに倣うということが意味を持ってくるわけです。だから神があるということを証明したってそんなものはどうにもならないのです。神の証明は暇だったらやってもいいというだけの話です。霊魂は不死か、といった議論も暇だったらやったらいいというだけのことです。それを現代的にカミュはこう言ったんです、「世界にはいくつのカテゴリーがあるかとか宇宙はどうなっているかとか、そういう問題が大事だと思う人は考えていったらいい。しかし突き詰めていくと、人間誰にとっても一番大事な問題はたった一つ、生きるべきか自殺すべきかだ」。やっぱりここに帰ってくるのがキリスト教であろうし、宗教だろうし、あるいは私の考えている表と裏、外と内という話だろうし、また気の持ち方ということにもなるわけです。

だから、気持ちの持ち方を重く受けとめなくてはならないと思います。何かが証明されなければある気持ちになれないというんだったら、それを証明したらいい。だけどそうでなくて、これは私にとってはどうしてもこういうふうに思えるということであれば、それはそれでいいのです。しかしこうとしか思えないということがどんどんいろんな形で増えていくということがあればもっといい。だから気の持ち方でもその時だけの気の持ち方もあれば、自分があるときにある気の持ち方になったものを大事にして、それをどんどん深めていくということもあるわけです。

私は実をいうと、内面世界について一つの概念モデルを仮説的に考えてみているのです。意識の世界があって、それを支えている概念の世界を考えるわけです。概念世界という土台があるというのは、いつもこういう事を意識するといつも同じ様な形で意識してしまうというということがあるからです。意識と

いうのはその時その時の流れですが、意識の底にその意識をある形で支えている概念の世界があると考えるわけです。そして、その下に実感の世界があり、その下に魂としかいいようのない世界があると考えるわけです。魂の世界とはどういうことかというと、そこから意識の世界にあるイメージを送り出していると考えるわけです。あるいは自分でも知らないうちに意識やら概念やら実感をある方向に方向付けていると考えるわけです。実はこの本の中にはそういう構造図を出しているんですけれども、これはオーソドックスな心理学をやっている人からは不評です。しかし、一時的な気の持ち方なんだけれども、その一時的な気の持ち方はいったいどういう根を持っているのかということを考えていくことによって、自分が深いところから見えてくるのです。もっと言うと、その一時的な気の持ち方というものが促し的なエネルギーを持ったものになっていかなければ、私たちは生き生きわくわくと生きていけないでしょう。

私はやっぱり生きるということを一番大事にしたいから、それならばさっきも言ったように、９０になっても１００になっても目を輝かせてわくわくしながら生きていきたい。それにはどうしないといけないのかというと、やっぱり一時的な気持ちの持ち方の底にあるものに気づいて、そこに十分に足がおりるように努めなくてはいけない。自分の深部にある基盤的なものにまで足を下ろすことができた人だけが自分の内的エネルギーの源と接触できるんです。魂のところにまで足を伸ばすことが出来れば、元気よく生き生きとやっていけるんです。逆に頭の先でいろんな事を考えて、合理的にやっていこうとするだけではどうにもならない。だからといって非合理主義を薦めているんじゃないのです。頭の先で考えることにも意味があるのですが、ただそれを気の持ち方にまでどう繋げていくかという作業がいるだろうという気がします。

そういう意味で私は一人称の人間学を考えるわけです。一人称、二人称、三人称ということを考えて、じゃあ神様の視点からというのは全然次元の違う話で、別枠として置いておかないといけない。実を言うと一人称の心理学をやっても二人称の心理学をやっても三人称の心理学をやっても、我々が気づくという意味での神様には気づかざるをえないと思うのです。

私は自分で自分の頭を作ったわけでないし、こうやってどう喋ろうとも思っていないけれども、ある一定のやり方で機能して、今言葉はつむぎ出されているわけです。この働きは神様の働きだと私は思うのです。しかし神様が私にそれを与えてくれたというふうには実は思っていないのです。神様の大きな働きの中のある極めて部分的な働きを私はやっている。みんながそういうふうな形で生きていると思うのです。だから確かにモナドなんだけれども、モナドから外は見えないのだけれども、感じとして私のモナドと同じようなモナドの中で、それぞれがそれぞれの働きをやっている。そういう意味で言うと蟻だって神様の働きの一部です。

いろんな人がいろんな認識の仕方をしています。神様はどこか空の上におら

れて、恐い顔で私たちを見ておられるとか、いろんな認識の仕方があると思うのです。だから神様だけを取り出した話というのは、一人称、二人称、三人称の人間学という話の中には直接的には入ってこない、次元の違う話だと思うのです。ただし、くどいようですけれども、キリスト教であろうとなんであろうと、神という形で考えてきたことというのは、今の一人称、二人称、三人称の人間学を突き詰めていけば、必ずその中に入ってこざるをえないというのが私の考えです。こういう認識の仕方をキリスト教的な言葉で語れと言われるとなかなか難しい部分があって、下手な語り方をするとすぐ汎神論だとかなんだとか言われるから、そういうカテゴリーにはめられると話が出来なくなるので、そういう事ではないと言っておきます。

ついでに言っておきますと、このあいだまで京都大学の哲学の教授でした上田閑照さんの初期の仕事に、エックハルトと禅の比較研究があります。「花は自ずから咲く」という話と、それから悟りの世界をいっている「庭前の柏樹子(庭先の白い花)」というのが実は同じ様な世界を現しているんじゃないか、というのを今から３０年くらい前に京都大学の教養部の紀要に書いておられます。それは後で『禅仏教』という筑摩から出た本の中に出ています。そうするとエックハルトが大前提とした神ということと、道元とか栄西とかが悟りの世界ということで考えた構造ということと、それから私がここで話している話とは、基本は変わらないと思うのです。エックハルトだってある時期には異端とされたわけだけれども、すぐにそうではなくなったわけです。ということで、神の捉え方あるいはそれに対するアプローチの仕方というのは、キリスト教の世界あるいはカトリックの世界においても極めて多様なものが認められてきたわけです。だからそういう中で私はラジカルに根本から考えたいと思っているのです。

中野：先ほどおっしゃった、魂というのがずっと下の所にあるんだという話で、イエスかノーかだけでいいんですけれども、いまイメージされているのは個人的なものですか普遍的なものですか？　それだけ聞きたいです。

梶田：そこはまた難しいんですが、そこは分けれないような気がしているんです。ユングは両方言いますね。私は分けてもしょうがないという気がしているのです。つまり個人的なものとしてしか深く探っていけないからです。自分の意識世界をずっと深部で支えているものとしての魂の世界とは個人的なものと言えます。しかし、これは実際には通底しているかもしれない。底がお隣さんとつながっているのではないかと私はイメージしています。結局最後はつながっているが、自分を掘り下げていくことによってしかそれをうかがい知ることができないのじゃないか、という気がしています。ただし私が口ごもりながら言っているのは、ひょっとして非常に関わりが深まっていく場合は、二人で深まっていくとか、相手の人の中にずっと入っていくことによって、共有の深い世界を見つけるということがあるかもしれないからです。私はそういうことをやっていないから、自分の中にしか下りていないから、その辺ちょっと口ごもる部

分がありますけれども。

附5．現象的主体と存在論的主体

大森：「エスプリ」の方に、自分が無いという風に書いているとおっしゃった。私は非常にものを単純に考えるんですけれども、実感の世界で実感で感じるんだったならば、やっぱり感じている主体というのは自分と考えてはいけないわけですか？

梶田：そうです。つまりレベルをかえていって、普通のこういう時には自分があるんですよ。実感もあるんです。体験の積み重ねもあるんです。自分の変容もあるんです。ただこれをもっと土台から、大前提から考えてみたときには自分は、主体としての自分は無いのです。だから本当はレベル分けして考えなくてはいけないのです。

私たちが日常生きている世界の中で私ということを考えるときには、やっぱり私に対してこだわっているわけだし、そうすると例えば何かを「きれいだ！」と思うとすると、「きれいだと私が思っているなあ」という意識が出てくるでしょう。例えばこの花に目をひかれたとします。するとすぐに「きれいな花だなあ」というふうに述語に整理されますね。そして、もう少し反省的に考えると「私は」この花をきれいだと見ているな、というふうに主語が出てきますね。日常的にいうと、本当は自分だとか対象とか言わないところで、はっといろんなことを感じているわけです。けれどもすぐにそれが述語的に整理され、それに主語が加わって、我々は世界を構成して見ていくわけです。だからそういう意味では主語があるんです。主体があるんです。

ただ主体になっているその私というものは、どういう意味でとことん主体だと言えるのだろうか、というのがさっきの話になってくるわけです。そういう意味だと、世界の構成の仕方としての私というものはあるわけです。けれども、その私というものがそもそもあるかどうかというと、そうは言えないという話なんです。つまりレベル分けして考えているわけです。

大森：魂とは関連するわけですか？

梶田：魂というのは実を言うと、私がこの花をきれいだと見ているということの下部構造にかかわってくるのです。下部構造のレベルでは、なぜ私はこの花をきれいだと見るんだろうか、という話になるんです。そうすると、私がこれをきれいとみるためには、私がこれにひきつけられざるをえない内側の何かがあるんじゃないか、という話になるでしょう。それを突き詰めていったときに魂の話になるわけです。だからやっぱりその時も私という主語があるんです。今これを見ているというそういう現在の事象を支えている私の構えみたいなもの、これを突き詰めると魂になってくる。しかし、もっと深く突き詰めていったときに、固有の私とか、原動力としての私といったものがあるんだろうかと

いうと、無い、という話なんです。

ちょっとこの辺を読ませてもらいますと、「私としての意識は自分が自分自身の主人公であるという暗黙の前提を含んでいる。私は自分の内外の対象に対する意識や操作の全てを生じさせ、統制するものとして意識されている」。これは今言った私がこれを見ているとか、なぜこれに魅かれたんだろうという魂を含めての主体意識ということです。「例えば毎日毎日の慌ただしい生活の中で我々の頭の中にはいつも様々な思いが浮かんでは消え浮かんでは消えしているだろう。今日中にあれとあれを片付けてとか、何とかあれがどうにかならないだろうかといった類の思いである。そのような場合、そこにはいつでも私が暗黙の内に行動や願いの主体として前提されている。つまり何かを片付けるものとしての私、どうにかならないだろうかと願っているものとしての私、等々が断続する思いの背後に一貫として想定されているのである。言い変えるならば私自身の主人公は私自身であるということは常に自明の事とされているのである」。ここまでは、私が見て、それを口に出さなくても常にぱっと自分の気づきを述語にして、それに主語を当てはめているという話です。主語としての私というのは常に前提されているし、自明の事とされている。

「しかしこの事は本当に自明の事なのであろうか。私自身の主人公は本当に私自身なのだろうか。例えば一度こういう風に疑ってみてはどうだろう。こういった思いは次々に頭をよぎっていくのだけれど、それを本当にそうさせているのははたして自分自身なのだろうか。何か大きな力が自分に働きかけてこういう様々な思いをもたらしているということはないだろうか。更に言えば、自分が考えている、願っている、意図している、というのは一種の幻想であって、本当は何かにそう思わせられているだけではないだろうか、といった疑いである。もっとロマンチックな言い方をすれば、いろいろな思いを自分で持っているように思い込んでいるが、本当は何かの聖霊がこの私にそういう夢を見させているだけではないだろうかという疑いでもいいだろう。あるいは〈科学的な〉表現を用いて、私は脳神経系という生理的メカニズムによって私自身があたかも私を主人公であるかのように考え行動しているわけである。しかしそうした生理的メカニズム自体私が作り出した物ではない。私がその事に気づいたときにはすでに私自身に与えられていたものである。だから私は与えられた装置によって私自身の主人公は私なのだ、と思わせられているのにすぎないのだ」。魂ということまで含めて、やっぱりそういう意味では一定の精神装置というような捉え方で、実感を持つ体験を持つというのもみんな装置の一つの機能として見ることができるんじゃないかというわけです。しかもその装置自身、私が作った物じゃないというところがここでの問題なんです。

こういった視点から考え直してみるとということで、ちょっと飛ばしまして、「この様な時、この私をこういった大きな何者かを想定してみたくなるのではないだろうか。つまり何らかの意味での普遍的な一般者の存在を考え、この小

さな私という存在は、そうした一般者を構成する一つの装置一つの具体的現れであり、私が具体的に追求し達成するところは、一般者が本来的に持っている広大な時間的空間的可能性の広がりの一部を追求し現実化したものに他ならない」。いろんな可能性、これは神様と言ってもいいんですけれども、いろんな可能性の、ある部分を私がやっているんじゃないか。これは実はここには書かなかったけれども、パウロが書いているんです。「私が生きるんじゃない。神が私において生きているんだ」と。感覚としてはそういうことを言っているんですけど。

附6.「救い」をどう考えるか

大森：そうすると、キリスト教で言っている救いに関わる私というものはどこにあるわけですか？

梶田：そこの所はちょっと発想が違うんです。パウロ的な意味での、つまり神の子が全人類のために死んでくれて、それで償いができて神と人々の間の仲介者となった、というパウロ教と言いますか、よくクリスチャニティではなくてクロスチャニティ（十字架教）だと言いますけれども、そういう救いの捉え方と私がお話してきたところとは、発想の土台が若干違うんです。パウロ的な救いのイメージがあってもいいし、無くたっていい、というのが私の立場なんです。そこの所は長くなりますから、私もその辺で実は若干書いてみたり考えてみたりメモしてみたりしているわけですけれども、普通言われている救いのイメージとは若干違うわけです。

ただし全く相反するかというと、そうでもないのです。パウロはパウロでそういう働きをさせられたわけだし、教父は教父でそういう働きをさせられたわけだから、人類がいろんなところでいろんな働きをさせられてきているわけです。そういうものの総体としての今のこの文化とか現代の世界があるわけです。キリスト教の神と言わなくたっていいのですが、一般者のそうした働きによって現代のこの世界ができているということです。そこで救いをどう考えるか。私はあまり存在論的に「私、梶田叡一」という絶対不可分の存在があって、それが救われてどうにかなるというイメージでは考えないのです。つまり、ここで述べてきたようなことに気づくこと自体がもう救いだと。これを受容できればもっと救いだと。

大森：その「救いだ」と言っている救いと言われているものがあるんじゃないですか？

梶田：難しいですね。いろんな時代文化に応じて救いの説き方はあったんだろうと思うんです。パウロ的な意味で、キリストが仲介者として、というイメージの救い、「償いの死」という救いのイメージもあっただろうし、あるいはそうでないイメージもある。私はそういう多様な救いのイメージが今我々の人類

の財産としてあって、私たちは必要ならそれを全部活用していけばいいという感じなんです。

これはどういうことかと言うと、私はこう思うのです。なぜ第2回バチカン公会議で「全ての善意の人のところに」という言い方をカトリックがしたかということです。この中でやたらとイスラム教に対して書いているのですが、それはキリスト教の中でのいろいろな聖書の解釈の違いなんかを大きく超えているんです。イスラム教という全く違う救いの体系を持っているところまで含めて、全ての善意の人に同じように兄弟としての救いがあっていいという考え方になっているわけです。これは極めてラジカルな話だと思うんです。

そこをふまえて考えますと、いろんな文化遺産として救いのイメージがあるわけだけれども、やっぱり最後は私というものが大きな動きの中の一部であるということが認識できるかどうか、それを受け入れることが出来るかどうかだと思うのです。もっと言いますと自分が生きていくとか努力していくということを大きな働きとの関係で意味づけしていけるかどうかということです。生きるにしても死ぬにしても何にしても、それが最終的究極的な救いじゃないかと思うのです。その大きな動きとしてということを、例えばユダヤ教のまだ伝統が残っているときにはああいう言い方をパウロはした。私はそういうふうに考えるわけです。その辺は何を手がかりに考えるかというのはみんな違うから、どういう促え方が良い、どういう促え方が悪いといった話じゃないと思うのです。

大森：僕はそれは非常によくわかります。非常によくわかるし、自分でもそう思いますけれども、その時に救われているものがあるわけでしょう。それは非常に単純に考えて自分じゃないんですか？

梶田：個別的現れとしての私なんです。つまり私の意識の世界、内面の世界。

大森：いや、内面だけじゃない。やっぱり身体を持っている、そしてそこに存在しているわけですから。

梶田：もちろん意識だけでなく、身体も全部含めてもいいんですけれども、個別的な現れとしての私なんです。ただし、個別的な現れをとことん言っていくと、大きな働きの一部分であるという話であって、私が無いというのは、私というのがとことんの最終的なユニットではないという意味です。今ここでの現れとしては、事実として現象的ユニットとして私は存在しているわけです。だからレベル分けして考えてみよう、という話なんです。例えば、ここでものを見ているというのは、現象的にはやっぱり私という主体なんです。見ているユニットがあるわけです。もちろんそのユニットは意識だけではなくて、身体を備えているけれども、しかしそれを支配しているのは一応意識の世界だから、そういう意味で私は意識ということを言ったわけです。

竹内：ずっとお話をうかがっていて、私はキリスト教について余り詳しくないけれども、むしろ仏教の考えに非常に近いというふうに感じるんです。それで

仏教といってもある派というかある時期の理論仏教でしょうけれども。つまりさっきうかがっていて面白かったのは、いろいろ空しいものだけれども、生かされているものだけれども、しかし例えば年とって何もすることが無かったらば、そこはそこで生きがいを見つけてわいわい生き生きとしてなければしょうがないじゃないかというお話です。私はあれが今日のお話で一番面白くて、つまり原理的にいえば一人の自分というようなことは幻想だというふうに言えるが、それはそれで生ききらなければならないものであるという考え方は、仏教でいうといわば差別相というふうになります。だけどそれは本来空なるものであるというふうにもう一つ別の次元で、つまり次元が違うとおっしゃったけれども、むしろ垂直的に交わる軸で考えると平等相とか空とかという考え方になる。

さっきからのお話を聞いていると、どうも梶田さんがおっしゃっている魂とか神とかは、私なんかが漠然と聞いて今まで理解してきたことよりは、空とか無とかいうのにむしろ近いというふうに私は受け取って聞いていたんです。ですから救いというよりは、さっきからおっしゃっているそれに気が付くことがすでに救いだというような言い方というのは、むしろ悟りとかそういうのに近い。私が狭い知見で理解している救いというのは、一人の個人の中に何かが明確に自覚されて働いてきてそれで何かがまったく転倒すると言うかそういう働きになるわけで、それはまあそう言い方をすれば、一般的には悟りにでもなんでもあるわけですけれども、そこに働いてくる主体とそれを覆してくる力との噛み合わせの中の自覚の仕方は、少し違うんじゃないかと漠然と聞いていたわけです。どうも私には全く分かりませんですけれども、外から眺めていると、そういう風に聞こえた。どうなんでしょうかねえ。

実をいいますとさっき上田閑照の名前が出ましたけれども、あれは私の同級生でありまして、多少の行き来はありますが、「禅仏教」というあの本はなかなかおもしろい本であったと思います。ただエックハルトと庭前の柏樹子が同じであるということについての彼の論文というのは、記憶がはっきりしてないですが納得しきれなかったという記憶があります。むしろその後で十牛図とかそういうのについて書いた方はかなり面白いことがありましたけれども。あのエックハルトと禅を直につなげるという考え方には、その当時ですが、僕はあまり納得しきれなかった。今は読んだらわかりませんが。以上感想だけですが。

梶田：私はご縁があってカトリックの中で大きくなって、今でもカトリックをやっているわけです。ご縁だから。私はよほどの事が無い限り、あまり変わりたくないのです。けれども、私はそれぞれのグループが、宗教であろうと何であろうと、それぞれなりにやればいい、という考え方をしています。例えば学派でもそうですよね、臨床心理学でも同じ様なことを学派ごとに違う言い方をするでしょう？まあその方が仲間うちで話が通りやすいことがあるからでしょうが、私はそういう党派性には組みしない。だから自分がカトリックであると

言うときもラジカルという形容語をつけるのは、普通のカトリックの人たちとは必ずしも党派的な意味での仲間ではないという差別的・区別的な意味で言っているのです。他の人と話しが合うか合わないかは知らないよと。同じ言葉を使っていても違うかもしれませんよと。それだけを言っていっているんです。だから私の考え方の内容をいろいろ分析していくと、いろんなものが入っているでしょうね。私が今まで折に触れて学んできたことが全部入っている。

今おっしゃって頂いたことにちょっと乗って言いますと、私は「色即是空、空即是色」というのが好きです。なぜかというと、いろいろと個別的な現れがあるが実は空なんだ、というところまでは誰でも気が付くわけです。色というのは「これはこれ」とはっきり言いきれるような世界ですが、これが実はそれほど根拠のあるものではないということまでは気づくわけです。しかし般若心経で偉いのは、すぐに空即是色と言っているところです。つまり何も根拠はないと言ったって、個別的現れは個別的現れとして全うしていかないといけないんです。それがさっき私が申し上げた、年をとって全部何も無くなった時に、どれだけ生きがいを持って生きれるか、毎日わくわく生き生きしながら生きれるか、そういう事だろうと思うんです。ここのところを一つ考えなければいけない。

それから救いというところでちょっと私が言い忘れていたのは、救いというのはヨーロッパ的な言い方ではないか、ということです。「本人が気づいていようがいまいが、救いというものがあるんだよ」というヨーロッパ的キリスト教的な発想があるんです。つまりパウロも「キリストがすでにあなたのために死んでくれているんだから、あなたたちはその事実に気づいてくれさえすればそれでいい」と言うのです。救われたその時点で本人がそのことに気づくかどうかは考えないわけです。もっと言うと、キリスト教では「末期の洗礼」があるわけです。もう意識がなくなってからでも洗礼さえすれば、その人はそれで天国に行ける、という発想があるわけだけれども、これも本人が自分の救いに気づいているかどうかを問わない。そういういわば、存在そのものとして救われたか救われないかという言い方があるのだけれども、私はそれには組しない。

そういうことがあったっていいけれども、私の気が付かないところで救われていようが救われていまいが、そんなことは私には関係がない、というのが私の基本的な立場なんです。だから気づきとか意識ということを言わざるを得ない。私が個別的な現れとしてここにあるとすれば、私が気づいた世界の中で私が大事だと思ったことを頼りに私が面白いことをやって生きていくよりしょうがないわけです。これが私に与えられた人生というものです。こういう発想で人間研究をするとすると、お互い何に気づいているだろうか、お互い何を自分が生き生きする土台として持っているのだろうか、などということにこだわっていくということになるわけです。

竹内：そこが出発点になるとすると、その今生き生きしている自分というのが

常にあるとして、存在としてというより意識という部分がむしろポイントになってきますね。そうすると自分というのは存在としては空なるものである幻想である、というのはある意味では仮説ですね。

梶田：そうですね。その通り仮説なんです。ただし一つの仮説に気づくか気づかないかで、自分への意味づけの仕方が全く変わって来るわけです。生き生きするとかなんとかが全部変わってくるんです。ただし意識と言いましたのは、私の意識に現れうるものの総体ということであって、魂とかあるいは身体全部を含んでの話です。私の言う意識は今ここで流れているものだけではないのです。

竹内：それは理解しているつもりです。

中野：簡単な質問ですけど、日本語で聞いたら非常によく分かったんですけれども、その第２テーゼのキーコンセプトになる「実感・納得・本音」というのは、例えば英文の論文で書けと言われたら困るんですよね。一番は「本音」のところなんですけれども、どう訳されますか？

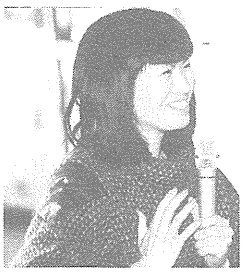
梶田：ちょっと難しいですね。そういうのを訳してみようとしたこともあるんですけれどもね。例えば私は「体験」と「経験」を区別して使うんです。これでまず行き詰まるんです。「実感」にしてもなかなか難しいですよ。いくつか議論したことがあるんですがまだ訳語が見付かってないのです。「本音」もそうですけれども。

その前に、「実感・納得・本音」は体験していくことによって形成されていくわけですよね。というのは、私の言葉の使い方で体験と経験を分けると、経験というのはそこで形成されたものみたいなもので、森有正の体験と経験の分け方と私とはどうもちょっと違う部分があるんです。いずれにせよ横文字には今の所まだならないですね。むしろまだまだこれから１０年２０年していく中で考えたいと思います。これは難しいですよ。ユングと鈴木大拙か誰かの対談がありますでしょ？　全部すれ違いですよ。

竹内：禅の人ですか？　久松抱石、潜一。

梶田：久松潜一さんでしたか。あれは全部すれ違っているんです。基本的なタームの理解が全然違うからなんです。だからこれはものすごく難しいですね。もっと言いますと、日本で人間学をやろうと思ったら、刺激はあらゆる所から得たらいいと思うけれども、最後は自分にピンとくる概念でもって自分なりのきちんと理論を組み立てないと、絶対に自分の本当の学問にはならないと思います。輸入紹介するだけだったら、どうせ違うけれどもまあ大体これで通じればいいということにしておけばいいけれども、本当に自分で学問をやるということは、自分で見えた世界を自分なりにきちんと組み立てていくことです。そうすると、その基本になる概念そのものがヨーロッパ的な概念では、一番のキーコンセプトとして無理があるなあ、という気がしています。

附７．方法論的な問題をめぐって



まどか：私も最初に紹介したように、やはり生命科学というものをやっていた関係で、「いのち」ということ、あるいは生きるとか、そこまで問われてきてしまう人間の問題というのを見ていくと、自分の学問をしたくなってしまうという問題が出てきますね。自分の言葉が必要というか、自分というのは私自身であってもいいけれども、日本人の蓄積された知識、知の世界の整理が必要だというところで捉えているんです。ですから先生のお話のテーゼはとてもわかりやすく、私はこういう事で悩んでいたんだとか、こういう事の問題が心理学の方からも共通にあるという形でうかがっていたんです。

テーゼ３の三人称の人間研究、人間科学というんでしょうか、つまり方法論の問題というところを今後どういうふうに語り合っていくか、はっきり言ってまだ日本の社会では語り合う仲間もいない状況だと思うんです。で、そこにちょっと触れながら、私なりに質問と言うよりは、先生とどういう所で接点が感じられたかということをお伝えして確認したいのです。

私自身は先ほどの「実感・納得・本音」というのを突き詰めて、「いのち」ということを日本語の学問作りにしていきたいということで、自分なりの実感や自分たちの本音がそのままこのからだの声を通してもっと叫び合って、翻訳でない言葉で共通理解を持ち合って、一つの非常にパブリックな知的な世界というものをこれから作っていったらいいんじゃないかと思っているんです。だから本当に原点は先生のテーゼ２の「実感・納得・本音」あるいは一人一人の魂的叫びかもしれませんし、うめきかもしれませんですけれども、今までの翻訳語で着せられていた着物を脱ぎたいというような、そんなところが出発点だと思っているんです。そうすると、私はどうしても三人称の人間科学、あるいはここで言う人間関係、というのが学の中でどう位置づけられていくかということが、非常に答えたく探したくなっていく具体的な現場になっていくんです。

この三人称の人間科学をやっていこうとすると、二つの問題にぶつかってしまうんです。一つは神の位置づけということ。例えば先生は、何かもよおされてというか何かの働きかけによって認識が始まっていくとおっしゃっていらしたけれど、これを私は宗派宗教でいう神ではなくて一つの「神」という捉え方で言っているんですけど、その神の位置づけがこの人間科学、第三人称の場合はどうなるのかということです。

それから二番目の事は、どうしても叫び的なあるいは実感とか本音的なところが出発点になるので、あるいは実際の人間関係のどろどろした現場があるいは自分の感情というのが出発点になるもんですから、今までのような外在的な学問というよりは内発的な内在型の学問方法論というか、その辺が整理されていったらいいんじゃないかと思います。そういう意味では人間関係科の人間観なり環境というのは、先ほどワークとおっしゃってましたけれども、もしかし

たらそういう事を探し合っているのかなというところで、私もなんとかここに居ようとしているんです。

そういう神の位置づけの問題と、後はデータの出発点を中に置くのか分析的に見ていく方に向いてしまうのかという問題があって、そうすると先ほどの先生の魂は私の魂でもあり、そしてつながっていくとおっしゃっていたあの辺りが私には非常に自分の問題の中でつながっていくんです。私たちはそれをライフネットワークと言い始めているんです。ネットワークというのは情報ネットワークからきているようにかなり現代的な概念で、社会構造まで変えてしまう、もしかしたら誰でもが平等にネットワークを持ってしまいますから、情報も偏りなく、上も下もないようなそういう社会構造をもたらしてしまう、そういうネットワークになるわけです。そのライフネットワークということと、今先生が感じてらっしゃる魂のつながり方ということがもし近い問題意識であるならば、私は先生がおっしゃっている魂のつながり方とか、あるいは個から他者へつながっていくという所をぜひもう少しうかがいたいのです。

そしてもしそういうつながり方が実感だけでなく一つの共通認識としてあるならば、先ほどテーゼ1でおっしゃっていた顔の後ろの世界にこだわって教育現場でも相手が何にピンときて何にピンとこないのかという事までも洞察して、どの様に援助するかと言っていた部分が、私にはどうしても援助というふうにならないのです。これは教育観の違いになってくるとは思うんですけれども、各個人が固有の世界を表層的には持ちながら、だけどもし魂ネットワークとしてつながっているなら、あとは血が流れていくみたいにお互いがどきどきどきどきと脈うつ、それしか私にとっては人間理解はないというか、教育現場というか、人と関わるというのはそれでしかないと思うんです。そこにはもしかしたら先生とか生徒とかそういう役割とか、そんなものもはすっとんでしまって‥‥。今はそんなところまでしか把握しきれていないんですけれども。そういうふうにして先生のテーゼ1から3をうかがっていました。

梶田：私は神様の問題というのは非常に難しいと思うんです。これは中世のスコラ哲学でいつも問題になっているんです。神様を出してしまったら話は簡単なんです。だけど出さないでどこまで何が言えるか。私のさっき言ったような意味での神様の感覚からいうと、一人称でも二人称三人称でもすべてのあらゆる人間の世界には神様は姿を現さないんです。ただし我々がやっていることは全部神様の現れですがね。もちろん非常時には表れてこられるかもしれませんですけれどもね。

でも、結局今私が言っていることは、スコラ哲学でやっぱり同じように考えられたんです。いろんなことに神様は触れない。特に哲学をやると触れたくなるわけです。しかし触れてしまったら全知全能ですから、オールマイティですから、切札ですから、すべて済んでしまう。だから私の書いたもので神様なんて現れて来るものは一つもありません。ただ大事なのは、やはり私たちが個と

して現れて個として行動している、そういうものの背後に大きな動きというものを感じるかどうか、あるいは認識するかどうかということではないかと私は思っているんです。

それから2番目におっしゃったことで、私もこれは難しいと思ったのは方法論の話。この学科はワークとかセラピーとかやっておられるからいいんですよ。ところが、論文を書かなければいけないという脅迫観念に凝り固まっている大学だと、例えば私が今日話したようなことがどうデータになっていくんですか？という話になるんです。私はそういう時三つ申し上げるんです。一つはいろんな場面で自由記述をもっと大事にしましょう。あるいは実際喋ったことをテープレコーダーやビデオで録って、それを書き出す。学校教育の場面でもよく教室の前と後ろにビデオを置いて録画し、授業のプロセスを全部書き出してもらうんです。プロトコルですね。生の発言、生の記述。同時にそこで参観している人全員に気づいたことを書いてもらって、同時に子供たちにも最後に感想文を書いてもらうんです。例えば、そういうのの分析をやっていくことが大事じゃないかと思います。つまり心理学でも、すぐに数字にしなくてはいけないという脅迫観念があるんです。だから結局は質的なデータを扱えなくなってしまっている。

ではどうするかというと、いくつかのやり方があります。一つはＫＪ法的なやり方で、つまり一人の書いたものをいくつかに分けて、これを仲間分けしていく。それを全部でやってもいいし、一人一人についてＫＪ法やってもいいし。そういうやり方もある。あるいはキーワード法と言って、こちらが大事だと思うことがどういう文脈の中でどういうふうに使われたか言葉を拾っていく。その文脈と言葉との関連を探っていくというやり方。それからもう一つは分類カードを使っていく、これが一番プリミティブなやり方ですね。もう一つはそういう自由記述だと際限なく広がるから、視点をいくつか作ってそれについて書いてもらう、自由記述してもらう。トータルな自由記述ではないやり方ですね。整理の仕方は同じです。それからもう少し細かくなると、文章完成法ですね。「私が大好きなのは‥‥です」とか、「今日私が気づいて一番大事だと思ったのは‥‥です」とやって文章を入れてもらう。段々にしぼりをかけていって最後は今までやったことの中で大事だと思ったことをワーディングして、インベントリーにしてチェックしてもらう。

一番自由度の高いのが自由記述であって、一番自由が拘束される、しかし見たいものがストレートに見れるのはインベントリーであって、その中間にいくつかのやり方がある。インベントリーももちろん「はい・いいえ」だけだと面白くない。各項目の間の相関係数をとって図解していくと、いろんなことがわかります。それから人と人との間の相関係数を出して、それでまた人を類別するというＱ分類的な行き方も面白い。

当然のことですが、数字にするのが目的ではありません。いろんな資料から

何をしゃぶってくるかということです。よく言われるポストモダンというのは、はっきり形になっていないものを形になっていないまま扱っていく。最近の文化人類学でも、社会学でも、みんなそういう行き方を大事にしています。そうすると自由記述だとか、発言記録（プロトコル）だとか、文章完成法だとかが大事になって来るわけです。つまり「はい」「いいえ」とかで丸をして数字にするようなものはガラガラポンで何か結果らしいものが出て来る。けれども、できるだけ自由度を多くしてやろうと思うと洞察ということが大事になる。そこが先ほどまどかさんがおっしゃったように、自分ということにこだわってどこまで考えてきたか、あるいは関わりの中でどこまで考えて洞察が深まったか、ということにかかわってきます。今日一人称、二人称ということを言いましたが、これで洞察が深まっていかなければ駄目だと思います。

洞察ということについては、その土台づくりも大切です。私は昔ある先生にこういうことを言われたことがあります。「心理学を本当にやるんだったら、心理学の本を読むより小説を沢山読みなさい。映画を沢山見なさい。」これは確かに大事ですね。人間の喜怒哀楽についての具体的な姿を知らないで、いろいろ研究してやろうなんて生意気な話です。心理学とか人間学をやろう、あるいはカウンセリングでもセラピーでもそうですが、それはもう本当に酸いも甘いも噛みわけないと出来ないだろうと思うのです。つまり一つの言葉が意味するものを、この人だったらこういう意味合じゃないかというようなことが洞察できなければいけない。それには自分も疑似体験も含め実感の世界を広くしておかなければいけないということもあるでしょう。

だからポストモダンで自由記述的なものをデータの元として使うようになればなるほど、やっぱり洞察ということ、そして一人称と二人称のアプローチということが大事になってくると思います。ここをどこまで深めていくかということが大事になると思います。

それからもう一つ、教育観の問題です。教育にはいろんな面があります。人格を形成していくという意味での教育はおっしゃるとおりです。ただし、私みたいにいろんな小学校や中学校や高校へ行くと、そういう面だけというわけにはいかないのです。「何で二次方程式が分からないんだ！」というようなこともやらなければいけない。もちろん、二次方程式を解けるようになりさえすればいいとは思わない。その子なりに二次方程式の意味が分かった上でそれが解けるということを大事にしたいと考えています。「実感・納得・本音」を大事にした教育とは、一人一人の学習者の生活的な体験に根ざしながら、どういうふうにものを考えていったら科学的にリファインされた、つまり常識概念とは違うきちっとした概念にたどり着くかという道筋を大事にすることです。そのためには、ネガティブケース、そうした道筋をうまくたどれないケースをいろいろと明らかにすることも大切になってきます。

人格形成の面だけでなくて、文化遺産の伝達という面も含めて考えると、やっ

ぱり教師が優秀でなければ駄目だということになります。優秀とは元々が優秀とかそういう意味じゃありません。よく勉強して、いろんな子供達の誤解の類型も分かっていて、あるいは中学生とか小学生はこういう気持ちの持ち方をするとか、こういう受け止め方をするとか、自分のとは違う子供たちの世界が見えてこなければ駄目です。だから、これはきわめて高度な専門性ということになるでしょ。

いずれにしても、教育を人間形成の面と文化遺産伝達の面に分けて考えると、私は文化遺産の伝達の方を中心に申し上げたので、ちょっと食い違いが出たのかもしれません。

伊藤：本当に今日は長時間にわたってどうもありがとうございました。